晴れのち行方不明

ウドの大木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
晴れのち行方不明

【Ｎコード】
Ｎ９８７２Ａ

【作者名】
ウドの大木

【あらすじ】
これはつまり学園ラブコメみたいなコメディ～であり、ファンタジックな心を胸に秘めた・・・・・・・つまるところこれはコメディーな学園生活である

零話目、じこしょうかい（前書き）

新番組連載スタ～ト！これから生暖かい様な早さで頑張ります！

『既に作者は頭がオカシイです』

零話目、じこしょうかい

世界とは今現在進行しているものであるが何処をどう間違ったのか
隣にもう一つの世界が生まれた

大袈裟に世界といっても小さい小さい世界だ
何故かって？
それは人がちょっと変わった力を持ってちょっと変わった生活をしているだけだからだ

力の名前は《ローレス》
不法という意味であり、世界の物理法則を全力で無視した力を持つ事が出来る
ただそれだけだ
歴史では表に出ていないが信長辺りの時代では既にいたらしい

一応組織擬を創り今現在の組織まで発展させてきたそうだがぶっちゃけ関係ないのだ
僕は僕らしくただ今の学校生活を満喫するだけだ

改めて自己紹介です
僕は佐我遊思（さがゆうし）、顔は多分真ん中辺りだと思う。髪は小学の低学年から白くなり、今では完璧に白髪となっている。
遊ぶ思いなんて意味不明な名前を授けた我が両親はお空の上に飛んでいった
親戚の悠（はるか）さんから電話で死んだとしか言われていないので詳しくは知らない。もっとも常に仕事に多忙な両親なので余り顔を合わせる機会がなかったからさほど悲しくはないが

今現在は親戚の悠さんの家に住んでいるのだが悠さんは見た目は２０代から３０手前
実際は４００そこらのオバ・・・・・・御姉さんです
そして角刈りにほりの深い渋いオヤジ、源さんは見た目５０後半、実年齢７００と超グランドファーザーだ

何故こんな長寿かって？
それはこの二人の力、ローレスの代償なのだ
老いる時を消し去った呪い、といっても二人は自らそうしたのだ。
子供が口出しをする気はない

そして今僕はローレスを持つ子供が通う学校、赤帝学園高等部、二年Ｄ組で寝ている

それは何故か！
昨晩友達が部屋に押し入り延々とトークと言う名の拷問（寝るとマッハパンチ）により寝たのは二時だったからだ

そしてその押し入った犯罪者、世羅美樹（せらみき）は元気に登校している
理由は簡単だ
彼女のローレスは【リミッター】、人間は常に２０～３０％程度しか発揮出来ない力を１００％引き出すことが出来る
つまりこいつは人の三倍回復も力も強いと言うことだ
美樹は茶髪のポニーテールでチビッコ。顔は可愛いとしょっちゅう言われ、守ってあげたい女の子７年連続トップである

守る必要もない程強いのにな

「なんか言ったゆうちゃん？」
いつの間にか隣にスタンバってる美樹を軽くあしらう
「美樹はいつも元気で可愛いねって言ってたんだよ」
「もう、ゆうちゅんったら♪」
照れやな美樹は軽く俺をつつく

このつつくは林檎を貫通するつつくである

何故俺は無事か
それが俺のローレス、【白銀】の力だ
この力を簡単に言えば防御の力
大切なモノを守る時、全てを防ぐ最強の盾となる力だからだ
と言っても普通は死なない程度までしか力は発揮しない。これが僕の力の制限なのだ
ちなみに美樹は発動後、最低でも二時間は戻らない
つまり迂濶に誰かに触れば命の危険があるのだ

どの力にも制限が存在する
条件型、副作用型と大きく二つに分かれるが能力次第で上下する為
さして気にする人はいない
それとこれは先に言っておこう
この学園全生徒が力を持ってるわけではない。大概その内の種は花
を咲かすことなく枯れて力を獲ることはない
だから僕達の様な既に力を持つ生徒は変に特別扱いされ、その待遇
の差に他の生徒から嫌われたりする事が多い
だから僕はこの学園が嫌いだ

でもま、僕は僕だし気楽に楽しむだけさ

一話目――愉快なクラス（前書き）

いぇ～～い？
あれ？なんだここ？
（前書きコーナーだよ）
マジ！俺様ここのメインパーソナリティー！
（うん。渋々ね）
渋々ゆうな作者！まあ仕方ない。頑張っちゃるよ！
ｂｙ慎

一話目――愉快なクラス

今は三時間目、英語の時間である
そして教壇で授業をするのは美樹よりちっさいロリッコティーチャー山下先生である
「え～っとですね～、教科書の２２８Ｐのケンとマイクの・・・・あれ？ケンとマイクじゃなくてノリとタケ？あ～！教科書間違った～」
クリクリのロリブォイスはクラスの男子に夢と希望と間違った進路を与えてくれます
ちなみに僕はそんな趣味ではない
「ちょっとゆうちゃん、まさかよからぬ思想を！」
「黙りなさい美樹、俺はもっとオトナの女性が好みだよ」
「にゃんですって～！私の何がいけないの！愛情？愛情がまだ足りないの！」
「だから黙りなさい。山下先生泣きそうだぞ」
ロリティーチャー山下は目尻に涙を溜めながら
「誰ですか～！授業中にお喋りな人は」
僕は深い溜め息をつきながら
「僕です。すいませんでした」
手を上げ立ち上がると先生はビクッと震える
「遊思君！いや～！許して！叩かないで！この場で服を剥ぎ取らないで。取るならせめて放課後の誰もいない教室の教壇のうえで！」
何を馬鹿全開にしてるんだこのあほ教師は
「若い性が！若い性が私に向けられる～！うわ～ん」
泣きながら教室を出ていった山下先生
後に残るのは呆然とした女子と殺気丸出しの山下親衛隊と美樹
「貴様は泣かせてはならない御方を泣かした～！」
『そうだそうだ！』

「ゆうちゃんがまさかそんなよからぬ趣味だったなんて！許さない。いますぐ直してあげる！」
突撃する殺意の壁に向かって叫ぶ
「もしこの男達倒したら日曜映画連れてってあげるよ～」
男の波は一瞬で無散し、壁に突き刺さっている
「もうゆうちゃんったら♪今回は許してあげるね☆」

便利だ便利だ
なにげにそう思いながら授業終了の鐘がなった
さて昼休み、僕は美樹から逃げるため屋上に向かう
何故ならあやつは必ず弁当を食べさせにくる。箸であ～んなんてやらせる

誰が日中黒い鞄の中で温められた弁当のお刺身なんて食べるか！
なんかデロ～ンとしてて妙な臭いするんだぞ
と言うわけで屋上に一番のりで到着し、鍵を掛けて日向ぼっこ
心地よい風に当たりながら焼きそばパンを食べる
後は隠している小さなシートを敷いて屋上のど真ん中で昼寝を始める

三分後

ガチャガチャ
早いなおい
ガチャガチャガチャガチャガチャ
鍵開けようかな～
ダルッ
ガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャ

ギンッ

鉄が鉄を斬る音と共に屋上の扉が倒れる

「ぬ、貴様か」

そこに立っていた夢実心（ゆめみこころ）。肩まで伸びた髪を白い紐で縛り、引き締まった表情か綺麗とゆうより美しい、かっこいいに近い顔

１７５と僕よりでかくて中々素晴らしいスタイルである

出てて引っ込んでてバランスいいんですよ

そうこうしてる内に夢実は斬り倒した扉を元に戻す

扉は何事もなかった様にくっつく

これが夢実の【逆行】、斬りつけた物を時間内に元に戻せば斬らなかった事にする、分かりやすくすれば戻るのだ

ただし条件は己が触れた最初の刃で斬った物しか戻せない。その刃が折れればそれで終りなのだ

「やあここちゃんこんにちは」

いつの間にか首筋に触れる刃〔黒天血〕

「貴様、一度その血をこいつに吸わせてみたいものだ」

「無駄だから辞めとけ」

白銀は死なない程度まで硬くなる

その度合いは分からんがこいつのフルスイングでも血は滲む程度で終っている

「ま、座ったら立ってないで」

隣をポンポンと叩く

素直に従い隣にあぐらをかく仮にも花の女子高生

「まだここで寝ているのか」

「まあね。僕としては馴染みだから」

「まだ固有名詞は僕なんだな。まだ忘れないか」

僕は昔は俺と言っていた
その当時は荒れていたのだ
まあ可愛い反抗期とゆうやつでその時の呼び名は《白髪鬼》。あのロリティーチャーがあそこまで脅えてたのはこれがまだ尾を引いているせいでもある

この白銀は特殊なローレスで、表は汚れ無き白の銀、他人を想い、己を捨てて守る聖者の盾
そして裏は闇に染まりし黒の鎧、他人を斬り捨て己を掴む破邪の槍

僕は一時期黒の翼、【黒鎧】になっていた
黒鎧は己の意思で硬度を決める。最強の矛であり盾にもなる。矛盾の力である
その代償は傷付けた痛みを己も背負うとゆう痛み分け
それを俺は振るっていたのだ

「情けないね。全く」
「だが貴様は変わった。ならばよいではないか」
笑う夢実はパンとイチゴ牛乳を渡す
「どうせ赤子（美樹）から逃げてろくな飯も食ってないだろ」

渡されたあんぱんを頬張りながらイチゴ牛乳
「うま〜い」
甘党の僕には嬉しい限りだ
「なあ遊思、君はどうしてそんなに苦しみを背負うんだい」

「何故そう・・・・・んぐ。おみょうんだゃい」
「食べながら話すな」
飲み込んでから考える
「背負ってないさ。適当に溜めて、適当に発散してる。例えば・・・
」
そのまま夢実の膝に頭を乗せる
「こんな感じで」
欠伸をしながらゆっくり目を閉じる
「時間になったら起こしてな」
「ふん。好きにしろ」
それは恋人の様に、温かな光景であり

悪魔召喚の儀式でもあった
「な、なあ遊思」
そっぽ向きながら話しかける
「私の家にでも遊びに来ないか。日曜辺りに」

徐々に赤くなる顔を眺めながら
「日曜は無理だ。少し前に美樹と映画に行く約束をしてしまった」
「ならば午後にでも来い。赤子の相手は午前中で十分だろ」
「いや、彼奴がそれを了承するわけないだろ」
「ふん、ならば力づくで離すまで」
黒天血を構え邪悪に笑う、その目は本気だ。本気と書いてマジ！と読め！
「やめろ！お前等二人が暴れたら町は倒壊する！」
「いいではないか。それで赤子が葬れるなら」

「そうだね～。ただ胸のデカイだけの彼方が消えればゆうちゃんは私のモノだしね～♪」
B級ホラー映画の如く床から突き出る腕
ポキボキと鳴らす指
そして吹き飛ぶ屋上！
悪魔の如きオーラを放つ美樹は残った屋上の床に立つ
「潰してあげるわ心」
「ふん、その貧相な体で何が出来る。刀の錆びにしてくれよう」
抜き放たれた黒天血は血管の様な紅い筋が刀身に張り巡っている
「なによ時代遅れ、付いて来れると思ってるの？私のスピードに」
「はっ、斬っても治してやらんからな」
因みに夢実の逆行は斬った本人がくっつけないと治りません

「ね～、喧嘩辞めなよ」
『ゆうは引っ込んでて！』
気迫だけで突風が起こるなんて！始めてみた！
まあ冗談は程々にして止めるか。学校壊れたら何故か僕が怒られる

一色触発の中僕はさりげなく石を空に投げる

カツッ

石が地に落ちると同時に二人の化け物が動いた

が、直ぐに終わった

二人の真ん中に立つ僕は回し蹴りを放つ美樹の脛に膝を、刀を抜く夢実の腕に拳を向ける
速度のある二人は止まる事なく突っ込み僕は事故防衛で硬質化。

その結果、本気で泣きながら脛を押さえて転がり回る美樹に、利き手がガタガタと震えて刀の抜けない夢実
そこにとどめの一言

「僕は喧嘩する子は好きじゃないな～」
「はい！もう喧嘩はしません♪」
「ふん、今回は遊思に免じて許してやる」

いや～扱いやすい二人だ

そして六時間目、
右にチビッコ、左にチビッコ、前も後ろもチビッコ
女子一同が若かりし１４歳の姿で授業を受けている。僕の目に悪魔が乗り移った分けでも新たな快感に目覚めた分けでもございませんこれは校内一の鬼蓄野郎、山田茂樹（やまだしげき）のローレス、【夢幻】である。己の見たいモノを自分の決めた空間内全ての人間に見せることが出来る。代償は時間切れと同時に自分だけ地獄が見える（この場合目に写るもの全てがむさ苦しい汗だくデブめがねに変わる）

授業終了と同時に発狂し始めた山田
「うあぁぁあああああいあああ！寄るな厚苦しい～。来るな！来るな！うあぁぁあああああいあああぐきょ！！」
柔道部八木塚が躊躇い無く絞め落とす

いつも通り楽しいクラスだ

デロ～ンとしたお刺身をほっぺに押し付けられながら今日一日が終わった

一話目――愉快なクラス（後書き）

どうだったかな？
あれだなおい、心ちゃん中々グラマラスじゃね～か！しかもツンデレに傾きつつあるなおい！
やっべ、次呼ぼうかな

次回もようチェェェェェェェェェェェェェック！

二話目、コワイコワイお友達（前書き）

慎―いやっふ～～慎だぜ、今回はこのお話の主人公！遊思に来てもらったぜ！

遊―初めまして、遊思です

慎―あれですね。貴様はあれか？あれなのか？

遊―いや、意味分かりませんよ

慎―この幸せ鬼畜野郎が！

遊―うわ、初対面でこんなこと言われたの岩倉以来だ

慎―まだ出てもいないキャラ出すな！

遊―まあ気にせず本編スタートで

二話目、コワイコワイお友達

「ねえ君～今暇～」
今時の金髪にブランドバックでそこそこ可愛いに部類する女が二人声をかけてくる

午前９：１０、約束の時間を過ぎてる今現在、そろそろ美樹が現れるころです
「あ～、離れた方がいいよ？」
「何言ってるの？ねえ今日付き合ってよ～」

あ、現れた

遠くからスキップしながら軽やかに（時速４０ｋｍ）現れ美樹はほっそりとした二本の美脚を揃え飛来！
脇腹に突き刺さる様に着弾した弾丸Ｘは着弾物Ｙを見事に吹き飛ばし、バス停の時刻表に見事にぶつかりＵ字に曲げて止まった
よかった、店に突っ込まなくて。弁償嫌だから

「ゆうちゃん、いつからタラシになったの？」
「違うよ美樹、その人は道を聞いてきただけだよ。そうですよね？」
女性二人は恐怖に引きつった顔で激しくうなずき逃げるように去った
「な～んだ、ごめんねゆうちゃん、はやとちりだった♪」
「別にいいよ。いつものことだから」
なんとか時刻表から抜けて気休程度に修復。そのまま何食わぬ顔で映画館に向かった二人だった

肋三本程輝の入った僕の腕にくっつく美樹はニコニコと笑いながら引っ張ります。気を抜いたら腕が外れてしまうかもしれません
「それで、なんの映画見るの？」
「えへへ～、これ」
指差す先にある看板には
【東京都千代田区～～～～～１２番地の佐々〇〇〇〇さんの借金生活に無断密着！】

「最悪だよ！ミタクナイ」
「違うよ！あっちあっち」
首をグョキョっと鳴らして向けられた視線の先には
【呪懇の歌】
なんとも解りやすいホラー映画ですね
「さ～行こ～」

こいつホラー大丈夫だっだっけ？

廃屋の様な誇りまみれの廊下を走る

しかし角を曲がるとそこは行き止まり

「はあ、はあ、は。そ、そんな・・・・・」

ピチャ・・・ピチャ

廊下から聞こえる水の滴る音

「お願い・・・・来ないで」

ピチャ・・・ピチャ

恐怖に染まる顔、そしてその瞳な写る小さくて青白い子供

ニタ〜っと笑う子供は囁いた

ツカマエタ、オニイチャン

「誰がお兄ちゃんだごぉらぁぁぁ！」

頬にめり込む拳
鼻血を盛大に撒き散らしながら回転して廊下に転がる少年

エ？エ！チガウノ！オニイチャンジャナイノ？

「まだ言うかクソガキィィェェェェ！！」

グボォ！ギュシャ！ヅャチュ！グュチ！！

ゴ！ゴワイヨコノネエチャン！オバケヨリコワイヨ！

ＥＮＤ

「いや～、怖いよ！怖いよゆうちゃん！」
「いや、確かに怖いよ別の意味で」

腕が人として不味いような音を出すぐらい強くしがみつく美樹をなんとかなだめながら映画館を後にする僕達

ブラブラと歩いて近くの店で昼食を済ませる
さて、次はここちゃんの家に行くのだがコヤツをどうするか。連れてけば確実に喧嘩する
・・・・・・よし、
「おい美樹」
「な～にゆうちゃん、もしかして愛のコクハク！もう場所をわきまえて♪」
「そっくりそのまま返してやる。それと午後に用事あるからまた明日な」
足早に席を立ったはずなんだがいつの間にか腕を２９０ °程捻られている
「イダダダダダダダダダダだ！痛いよ美樹！」
「用事って夢実の家に行くんでしょ」
「違う違う！悠さんに用事頼まれてちょっと出かけるの」
「え？会長が？なら信じてあげる」
助かったぜ
悠さんは僕らローレスの人間を束ねる組織、ホデリ日本支部会長なのだ。ぶっちゃけ他国の組織を入れても三本指に入るツワモノです

なんとか誤魔化して素早く帰り、お次の目的地に向かう

夢実一家は昔かなり強い剣豪の血筋で母親が逆行の力を持っており、
父親は普通の専業主夫

あ、そういえばすっかり忘れてました。
元々ローレスは遺伝式で受け継がれます。開花しない場合もあるが
飛び遺伝で孫がなる場合もあるんです

さて、夢実家は木製純日本家屋。風情ある造りで結構気に入ってます

「ごめんくださーい」
ガラガラと戸を開けると飛んでくる刺身包丁

額に刺さり仰向けに引っくり返る僕

「キャ～～、ひ、人殺し」
大変です！お隣さんに見られてしまいました
素早く起き上がり弁解する
「違いますよ。これは玩具ですよ」
腕をペシペシ叩きながら玩具であるとアピールする。痛いんです。
でも我慢です
「あら、そうでしたの？」
「親戚の子供の玩具ですよ。驚かしてすみません」
「いえいえ、こちらも大袈裟に叫んでしまって」
お互い和やかに笑その場を後にするい
夢実家の評判を上げたので後で何か貰いましょう

さて、先程飛来した刺身包丁片手に殴り込む
「ゴラ～！アブネエぞ～」
勝手に玄関に突撃
そこには夢実家専業主夫、夢実賢実（けんじ）が必死にまな板と鍋の蓋で必死に苺タルトとクロワッサンを死守し、夢実家の主将、夢実璃小（りこ）が岁と鋸を恐ろしい速さで乱舞している
「ケンさん。よこしなさ～い」
「リコさん。まだ駄目ですよ！」
まな板と鍋の蓋程度でここまで防げるのだからご先祖様はさぞ凄かったのだろう
「ちょっと二人とも！危ないですよ」
ピタリと止まる二人
そして罰の悪そうな顔でお互いこ武器と防具をしまう

「だってゆうさん、ケンさんったら味見させてくれないんだもん」
「だからこれは心が作ったんだよ。つまみ食いしたら・・・・・ヤバいよ」
「ばれないばれない」
いえいえ、不味いですよ
「母、何をやってる」
だってさっきから後ろにいるんですから
「あ、あらココちゃん。いいたの？」
「ああ。母、後でじっくり話すとしよう」
睨んだ後でデザートを持って二階に上がる
璃小さん物凄い震えてたよ

さて、只今ここちゃんのお部屋にいますが本当に現代を生きる華の女子高生でしょうか？

壁に飾られた古今東西あらゆる武器と達筆で力強く書かれた一触即発。棚に並ぶかなり珍しい置物の数々
そして何故か休日に袴姿

きっと彼女はご先祖様の血を色濃く受け継いだんでしょう
「どうした遊思？キョロキョロとして」
「いや、何て言うか・・・・・君何時代生まれだって聞きたくなる部屋だなって」
「何を馬鹿な事を。平成生まれに決まっているだろたう」
そうだね。ソウイウコトにしとこう
「それで、何か用事あるの？僕を呼び出して」
「あ、いや、そのな・・・・」
目を泳がせながらさりげなくデザートを押し出す
「この頃お菓子づくりを始めてな・・・・偶々お前もお菓子というか甘いものが好きだから」
「・・・・つまり食べていいの？」
「まあ・・・・な」
同意を得たので早速タルトを頂く
「！！！！！！」
柔らかい歯応え！そして口のなか全体に広がる塩分！！

なんだろこの破壊力
甘いものがこんなしょっぱいと涙が止まらないなんて

「どうした遊思！急に泣き出して」
「ぐすっ、食べれば分かるよ」
半ば強引に心の口に捻じ込む

「すまん遊思。これは切腹ものだな」
「いやいいよ。ただ素直に一回殴らせろ」
長い長い沈黙に鈍い音が木霊した

そんなこんなで家に帰ってきた俺を最初に出迎えたのは満面の笑みの美樹

「ゆうちゃんおかえり～♪」
「・・・・美樹さん？何故ここに？」
「会長にちょ～っと聞きたいことがあってね。えへ♪」
一歩、また一歩近付く恐怖に足が震えて動けない
誰か助けて！いや、来ないで、お願い許して！

「い～～～や～～～～」

二話目、コワイコワイお友達（後書き）

慎―はい、やっぱりこいつ鬼畜野郎ですね
遊―うわ、万年フェチの貴方には言われたくないですね
慎―うわ！先輩に対する暴言だ！これはキッチリお仕置きだな、くらえ！！
遊―うわっ、誰の靴下ですか！指先辺り黒いよ
慎―卓球部の土井君だ。最近水虫に困ったとか言ってたな
遊―最悪だこいつ！こうなれば喰らえ！美樹～～助けて～
慎―やべ！俺死ぬ？今回で死ぬ？こうなりゃ次回に引っ張るぜ

また今度生きてたら会おう――ｂｙ慎

三話目・ビュ～ティフルガ～ル（前書き）

慎―ほほほ～う！ままま慎ですってうひゅっ
美―待てコラ～、ゆうちゃんに代わってお仕置きよ♪（メキョッ）
慎―ノ～！スタジオ壊れちゃうよ！こうなりゃこれだ！さっき遊思に出したコップ未洗浄！口つけたのはここ！
美―それで、今日のお仕事なんですか？
慎―まあ簡単なトークですね。どうです遊思君のことは？
美―（ゴキュゴキュ）ぷは～♪そりゃ～決まってるよ。アイラブゆ
―――
慎―時間が押してるんで本編どうぞ

三話目・ビュ～ティフルガ～ル

僕は今お空を飛んでます
青い空、白い雲
そよ風吹く空を僕は今飛んでます
ほら見えてきた
茶色くてしっかり踏み固められてるグランド
近付く白い白線

「ゆうちゃ～ん。カムバ～～～ク！」
校舎の二階から叫ぶ美樹
貴様だけは許さん！

午前の陽射しの中、僕はグランドと熱いキスをした

事の発端は一時間目が終わった小休憩、次の時間が自習になったためここぞとばかりに屋上に行こうとしたのだが美樹に捕獲された
「ね～ゆうちゃん。委員会何にする？」
「委員会？やりたくないからパス」
「え～なんで～。やろうよ～～。ほらほら保険委員が丁度男女一人づつだしこれはやるべきだよ♪」
「僕は身の危険を感じるから嫌なの。だって保険室の先生目に毒だもん」
保険室の先生こと夜司乙（やしおがみ）神はギリギリＲ１８指定な先生なのです
「大丈夫だよ。先生はつまみ出すから♪そーすれは二人っきりだよ」
「結局身の危険を感じるじゃんか！嫌なものは嫌だ」
すると美樹は目尻に涙を浮かべおもいっきり叩いた
「ゆうちゃんのバカ！」

パリ～ン

ガラスの割れる音と共に宙に浮く僕
「あ！ゆうちゃ～ん」
急いで窓から身を乗り出す
「ゆうちゃ～ん。カムバ～～～ク！」

そして今現在痛い体を引き擦りながら体育館裏に到着
しばし休むとしよう、とゆうことで寝てます
ああ、風が心地よい

なんて思ってると誰かが近付いて来ます
ガサガサと雑草を踏みながら近付いて来ます
目を開けそちらを向いてみると一人の生徒、ツインテールで小さい眼鏡、身長は美樹より多少大きい（美樹は１５５）程度で美樹より発育が良い体つきで靴を見る限り１年生だろう
そんな女の子は僕を見るなりいきなり頭を下げた
「すいませんすいません。お金持ってません。許してください！」
キュートボイスで謝られてもこちらが困る
「あの～。別に恐喝しませんよ」
「ひっ、ならもしかして体が目的ですか！」
「いい加減にして下さい。僕はそこまで地に落ちた事は一度もありません」
まったく言い掛かりにも程があるのでかなり訂正しましょう
「僕はただここで休んでるだけです。君に危害を加える気は欠片もありません」
「本当ですか？」
そんな怯えた目で見ないで下さい。意味なく罪悪感が沸きます
「本当です。勝手な勘違いです」

「すみません・・・」
だからそんな目で見ないで！罪悪感沸きますから
「あ、私桐下理沙（きりしたりさ）と言います。あの～先輩ですよね？」
「そうです。僕は佐我遊思、２－Ｄです」
「２－Ｄの佐我遊思さん・・・・・ひっ！」
またですか！またそんな怯えた目ですか！
「ゆ、ゆゆゆ遊思さんって確か白髪鬼っていう・・・・」
「それは昔の話です。今はなんでもありませんよ」
ほんの少し怯えが治まったか？
「でも、小学校から髪を染めて来る人皆殴ってたって兄が」
「なら兄に伝えて下さい。覚悟しとけと」
「ひっ！」
ああもうどうでもいいや。そのまま寝そべり目を閉じる
心地よい風が吹いて涼しい
理沙とやらはその場から動いてない様で、あ、とかその、とか小さい声でモゴモゴ喋ってる
「何か他に用事でもありますか？」
目を閉じたまま問掛ける
雰囲気的にビクッと跳ねてからオドオドときり出した
「実は私転校して来たばかりで道に迷ってしまって・・・・」
「迷子か。それならここを真っ直ぐ行けば正門が見える。そこなら迷わないし警備のオッサンに言えば職員室まで案内してくれるよ」
「本当ですか！ありがとうございます。遊思先輩って噂よりずっと優しいですね」
「過去は過去ですから」
理沙はもう一度頭を下げ小走りで正門に向かった

5分後

ガサガサ

「先輩・・・また迷いました・・・・」

結局僕が直接連れていく事になった

さて今はお昼休み、恒例の屋上昼食は俺の隣に美樹と心、向かいに三浦渉(みうらわたる)がいる

渉はテンパである。それ以外は普通だがどんな事をしてもテンパである。こいつのローレス【ツイスト・トルネード（自名）】は触れた物がいかなる硬度で厚くても曲げる力

条件は厚さによるがその物に触れ続けること。一瞬でも離れればリセット。初めからやり直しなのだ。

ちなみなこの力を使った次の日は必ずテンパになる。こいつの場合は関係ないが

「ほらゆうちゃん、あ～～～ん」
「だからやめろ。なんで冷蔵庫で冷えたとろけたチーズなんだよ！歯の裏にくっつく」
「赤子、嫌がる物を無理に勧めるな。ほら遊思、これでも食べろ」
「やだ！そのレーズンパンのレーズンどう見ても皮つきブドウだよね」
「何を馬鹿な。これはレーズンだと容器に」
千切ったパンから染み出るほのかに甘酸っぱいブドウの汁
「・・・・・すまん。母の仕業だ」
「へへ～ん。料理が出来ないなんて致命傷だよ～」
「赤子、お前の弁当は９割り冷凍物だろうが！」
後ろで激しいバトルが繰り広げられるのを無視して渉の弁当をつつく。渉母の玉子焼きは美味いのだ
「モテルって罪だな」
「黙れチリ毛、その髪に蟻と土をを突っ込むぞ」

のどかな昼飯時
そんな屋上に現れたのは
「あれ？中庭じゃない？あ、先輩！」
理沙です、また迷子ですか？中庭ってここは屋上だよ？
「どうした。また迷ったか」
「はい。実はお弁当を中庭で食べようと思ったんですが迷って」
トボトボと歩いて隣に座る
後ろの魔神はまだ気付いてません
「おい佐賀！貴様新たなジャンルに手を出しやがったのか！後輩キュートキャラか！そんなに後輩がいいのか？紹かぶろきょ！」
怯えて僕の後ろに隠れる理沙に代わって黙らせる

「理沙。兎に角中庭は下だ。階段を重力に従って行けば到着する」
「あの～、お昼一緒じゃ駄目ですか？まだ親しい友達もいなくて、それに先輩優しいから・・・・・駄目ですか？」
だからやめてよその悲しみ混じった涙眼、断ったら僕罪人扱い確定だよ！
「分かったよ。僕は構わないけど後ろの二人に気を――――」
首筋にヒヤリと触れる黒天血と頭を鷲掴みする小さな手
「ゆうちゃ～ん、どちら様その子？」
「ひぃっ！」
「遊思、返事次第では双方・・・・・殺るぞ」
「ひぃいいいい！！！」
そりゃ～恐いよね。それなりに免疫ある僕ですら怖くて動けません
「ひっ、ひひ、ひぐっひっぐ」
あらららら。泣き出しそうです
「泣いて許すなら警察はいらないよ♪」
「泣いたところで状況は変わらんぞ」
流石に止めないと理沙の心に大きなトラウマが刻まれてしまいます
「二人とも落ち着け。この子は一年の桐下理沙。今日転校して来たばっかで職員室に案内したんだよ」
『だから何？』
恐～～！止まらない！もう止まらないこの二人！
「ひぐっ、ひっぐひっぐ！」

涙腺崩壊

「ぅわ～～～ん！」

大気が破裂した

今僕を含めた四人は空を飛んでおり、周りには屋上を型どってたコンクリートや鉄筋も空を飛んでいる。

『へ？』

さっきまで僕達は確かに屋上にいたよね？

それが急に空に投げ出されたのだ

「ゆ、ゆうちゃん！私今空飛んでる！私今鳥だよ！」

混乱しすぎです

「遊思！渉が頭から急速落下してるぞ！」

まさに隕石の如く頭からグランドに直行する渉

あのままでは首が・・・・

「惜しい人を亡くしたな」

そして地面にぶつかりゴォキュッて音が

ボヨン

ああ！渉のテンパがクッションの様に衝撃吸収！

無事着陸した渉の上に降り注ぐコンクリートの山

「惜しい人を亡くしたな」

「それより遊思、着地出来るのか」

「着地っつうか着弾な。死にはせんから安心しグホッ」
脇腹にコンクリート着弾！
そのまま身を任せグランドに沈む僕、そこに降り注ぐコンクリートの嵐

そこから先の記憶が無く、あの高さからスタッと着地した化け物ここちゃんとズカンと小さなクレーターを作って着地した魔物美樹（生徒目撃談）
二人は直ぐ様僕を救出してくれたそうで、そして僕は保険室のベットの中だった

「なんでこんな包帯巻きなの？」
現代を生きるミイラな僕は横にいる二人に問掛けます
「夜司先生が勝手にやっていた。かなり重傷だと眼を輝かせていた」
「いや、ほぼ無傷ですから。ほどいて早く」

「アイアイサ～♪」

メスとハサミをジャキン！と構えた美樹
「いや～！いや～！死ぬ～～イタっ、痛いって美樹、チクチクするって何その顔！凄く幸せそうな顔！S！美樹ってS！」
「あは♪今ゆうちゃんを支配してる気分！夜司先生の気持が分かるかも！」
「止めぬか赤子、やるなら一気に殺るものだ」
「ちょっと待て心！殺るって何だ殺るって！」
『ふふふふふ～～』

この二人先程のことをまだ根に持ってるのですね

ここから先の描写は控えます
どうぞ生暖かい惨劇を想像してくださいね（ＢＧＭにワーグナーの名曲、マイスタージンガーを）

さて、体のあちこちに赤い点が付いた僕は遠慮無く二人をひっぱたき保健室から追い出す
その後鏡を見ながら一人で消毒している
制服はボロボロなので保健室の貸し出し用ジャージを着てる
「痛いなまったく」
上半身は裸で消毒液をピタピタ当てている

コンコン

「誰ですか？」
「せ、先輩～」
「理沙か？入りたきゃ入れば」
「失礼しま～～ひゃぁっ！」
あ、服着るの忘れてた
いそいそと上着を着て先程のことを聞いてみる
「何があったんだあれは」

「実は私も分からなくて。泣いたらいきなり周りの物が飛んでって先輩も一緒に」
まず間違い無くローレスだろう。条件は恐らく泣くか精神不安定になるか。もしくは死ぬほど恐い目に合うか
「それにしても先輩ほとんど怪我してませんね。赤い点が付いただけなんて」
「いや。これは魔神二人のせいだから。僕は物理的には殺せないからね。死なない程度の硬質化が僕の力だから。それよりちょっと部屋を出てくるないか。消毒の続きをしたいんでね」
先程の光景を思い出したらしく真っ赤になって頬に手を添える理沙
「あの・・・・私お手伝いします」
「いや、流石にそれは」
「・・・・・やっぱり駄目ですか・・・・」
だからやめてよ！反則だよその眼！チキショウ、僕が坊やだから心がこんなに罪悪感で満たされるの！エゴだよこれは！
「はぁ・・・分かったよ。お願いする」

背を向けて上着を脱ぐ
キャって小さな悲鳴をあげてからゆっくり丁寧に液を浸したガーゼを当てていく

なが～い沈黙を先に破ったのは理沙だった
「最初に会ったのが先輩で良かったです。こんなに優しい先輩で」
「そうですか。まあ気を付けた方がいいよ。ある意味ここの生徒は異人ばっかだから」
「でも・・・・先輩は優しいですから」

え？何この展開？
ラブ？ラビュですか？ラビュコメですか？
ちょっと待って、時間くれない？混乱してるからさ、だって僕子供より大人な女性派だよ。そりゃ～美樹より断然上だけどさ、心より下だし僕メガネっ子はまだ火が付いてないし付かないしさ
でも何この雰囲気、耐えれない。僕にはまだ早いよ！何この保健室シチュエ～ション！エタノール臭が鼻孔をくすぐる！

ピト

ひ～～！何故にガーゼではなく素肌！温かい！じゃないや何故に！
これはマズイ！何とかこの状況を切り抜けねば・・・・
「先輩・・・・」
「は、はい？」
裏返るよ声が！
「その・・・・明日から先輩のお弁当作っていいですか？」
「・・・・お弁当？」
「はい。今日先輩のお弁当無かったから・・・・迷惑ですか？」
後ろから放たれる期待と不安入り乱れるオ～ラ！
駄目だ！断ったら僕は世界を敵に回してしまうぞ！純情な乙女の気持は裏切ってはいけない気がする！激しくする！
「・・・・迷惑じゃないならお願いします」
「ホントですか！」
ああ、僕は明日からあの二人をどうやって止めよう

今日の記録

桐下理沙

今日早速道に迷い学校に遅刻してしまった。知らない山を歩いて知らない川を渡って気付いたら学校の敷地にいた。
そこであった佐我遊思先輩は兄が口うるさく言っていた白髪鬼だった。でも先輩はとても優しくてカッコイイ先輩だ。
初対面でいきなり謝って迷惑を掛けてとても恥ずかしい。さらに明日から先輩のお弁当を作ることになった。嬉しさの余りまた山道を歩いて帰ってしまった。反省です
恐い先輩が二人もいたけど絶対に負けないようにしよう

今日の私お疲れ様
明日の私頑張って

明日は今日より幸せでありますように

日記を書き終り大きくのびをする
隣の部屋からは兄のゲームの音と愚痴が聞こえる

「あ～またバットＥＤかよ。どうすりゃ有紀ちゃん落ちるんだよ！」

兄の未来が心配です

「ただいま～」
姉さんが帰ってきた
今日あった沢山の事を話そう

でもその前にお風呂に入ろう

三話目・ビュ～ティフルガ～ル（後書き）

慎―ギホッ！グハ！ムキョ！ズア！
美―何が！何あいつ！ムカつきよ！ムカつきよ！
慎―だ、だからってやつあたブキョタはっ！
美―ゆうちゃんもゆうちゃんだよ！ちょっと私より発育いいからって～！ゆるすまじ！（パリ～ン）

慎―え～美樹さんがスタジオの窓から飛び出して行ったので無事です。次回は誰が来るか（スカーン。慎の額に矢が刺さる）

次は私が行く。心して待っていろ

もし生きてたらまた会おうｂｙ慎

四話目☆ピンチピンチピ～ンチ（前書き）

慎―Ｗｅｅｅｅｅｅｅｅｅｅｅｒｅｅｅｅｅ慎だぜ！
心―のっけから若者が分からんネタをするな
慎―ゴメンナサイゴメンナサイ首筋は勘弁して
心―ふん。今回は見逃してやろう。それで、遊思のコップは
慎―先程美樹さんが持ってきました
心―貴様、少々仕置が必要か？
慎―ダメ！止めて！優しく！優しく時に激しく！

四話目☆ピンチビンチピ～ンチ

只今僕は悠さんと源さんと食事中です
源さんは先程から異常な速さで焼き魚を平らげてます。もう骨すらないです
「で、聞きてー事ってのはなんだ？」
「ああ。実は桐下家についてなんだが」
源さんは楊枝を歯に刺しながら暫く考え
「桐下家、確か江戸末期の家柄だったな。元は藏切(くらぎり)家の者で能力が分かれた後に分家と宗家に分かれたんだ。昔は名の知れた名武将の家柄なんだが宗家が裏切りで滅んで今じゃ桐下家の兄妹が唯一の能力保持者な筈だ」
「それでその能力ってのは何なんだ？」
「空間の膨張だ。能力者の周りにある空間のそのものを肥大かして触れたものを押し出す。確か発生条件が恐怖だったな。まさかそいつが学校に？」
神妙に頷く僕を見下ろし頭を抱える源さん
「いいか、何があってもそいつを本気で泣かせるな。学校位平気で吹き飛ぶからな」
そう言って源さんは立ち上がり胸一杯に息を吸い一気に吹き出す
すると源さんの体は徐々に小さくなりあらゆる場所から黒い毛が生えてきて数秒後には黒猫になっていた
食後の儀式である前足で顔の洗顔をした後こちらを向き
「お前の周りには危険物が多すぎる」
そのまま居間へと向かっていった

源さん。本名は不蔵技源鉢(おおくらぎげんぱち)
ホデリ日本支部の四聖獣とも言われる程の強者で、白虎の位を持っ

ている。ただ単に猫だからみたいな理由でも無く、７００を超える歳に蓄積された知識とズバ抜けた身体能力は四聖獣でも最強なのだ。源さんのローレス【猫】。ふざけた名前だが猫に変化してから一年の時を止める。それ故に源さんの体は江戸時代のまま一切歳をとっていないのだ。

ついでに付加説明するが残りの三人だが青龍は９代目で初の女性、時永龍御（ときながたつみ）２０歳で剣武の才に秀でた人で心の師匠である。腰まで伸びる髪を先っちょだけ縛り引き締まった顔立ちでかなりカッコイイ人である。

次は朱雀の乙我翁朱正真正銘（おつがおうしゅ）のオカマだ。見た目は確かに女っぽいし仕草も女っぽい。ただ早朝に顎の点々を見る度涙が込みあげてくるのだ

そして玄武の佐我武敬（さがたけよし）俺の親父である。ひょろっとした眼鏡ノッポでボサボサの髪をかきながらいつも笑っている親父だった。親父の死で玄武の位置が空き、そこに名前だけ俺が入っている。今は修行中の身なので仮玄武なのだ

この四聖獣の人間は能力を最大限まで引き出せる。この三人は能力が高くリスクの低いという反則組なのだ。まあその分の修行を乗り越えた強者だからだろう

因みに源さんは通常でただの猫。最大で虎黒となる。一度だけ見たが二度と見たくない恐さだった。物凄く邪悪なオーラで背景が歪んでたからな

「あら遊思さん、顔色が悪いですよ？」

「悠さん、そりゃー食事中にあの源さんを思い出したら・・・・」

「あらあら学園の白髪鬼が虎に臆すんですか？」

ニコニコ笑う悠さん。彼方ぐらいですよあの源さんを手なずけれるのは

食器を片付けながら深い溜め息を吐き、学校へと向かった
さて、あの二人から核のスイッチを守るか

パ～ンチパ～ンチキ～ックキ～ックフックエルボ～ソバットラリアットキン肉バス◯ー

斬斬斬

「せ、センパ～イ！」

ボロボロになって屋上に崩れる僕に駆け寄る理沙
だがそれを拒むのが二人の魔神
「後輩の癖にゆうちゃんに近付くなんていい度胸ね～。しかも手作り弁当持参！」

「どうやら少し仕置が必要なのかもしれないな。どうする？痛いのとキツイのとどちらがいいかな？」
「ヒイィィィィィィィィ！！」

震え上がり屋上の隅に追いやられガタガタ震える理沙
この緊急事態に誰があの二人を止めるんだ！傷付く体（外傷はなし）に鞭打ち立ち上がる
「お前等、そこまでにしとけ。昨日みたいに吹き飛びたいか」
『どうせ着地できるし』
人外の輩め！お前等が無事でも僕が無理じゃい
ゆっくりと歩き間に割り込み理沙の肩に手を乗せ
「ちょっと目を閉じて耳を塞いでくれないか？」
「え？先輩？」
「いいからいいから。僕を信じてくれないか」
不審ながらも素直に従ってくれた理沙に感謝して二人の方を向く
ニッコリ笑いながら二人の肩を叩く
「テメー等いい加減ガキみたいな戯言抜かしてねーで少しは成長したらどうだ？」
明らかに雰囲気が変わった俺に対し引きつる二人
「俺としては穏便に済ませたいんだがね？それとも少し遊ぶか？あ？」
ガタガタ震える二人は全力で首を横に振る
「ゆゆゆゆゆうちゃん、もしかして戻った？」
「そりゃ～これだけ殴られ斬られて挙げ句の果てに学校壊れる手前までくりゃ嫌でもな」
昇降口の壁を軽々砕き又々ニッコリ笑う
「ゆ、遊思、取り合えづ落ち着いたらどうだ？」
「はっはっはっ、なら今すぐ理沙に謝りなさい」
二人はその場で深々と土下座して謝った
『すいませんでした理沙さんこの野郎もういじめないので調子に乗

るなよ許してください夜中背後に気を付けろよ』

「ヒイィィィィィ！」

無言で二人をひっぱたいておいた

ピンポンパンポ～ン

『二学年佐我遊思君、お客様が御越しです。１０秒以内に校長室にスキップで来なさい』

「無茶苦茶な！」

と言いつつも律儀に守る自分が悲しい

校長室に着き軽くノックをする

「ワンと鳴いてから入ってくれ」

屈辱に耐えながらワンと鳴き戸を開ける

「あら遊ちゃんお久～。会いたかったよ～」

何故カマ野郎が此処に？白のロングスカートなんか履いてんじゃね～よ

カマ野郎の乙我翁朱はこちらにパタパタと歩みゆり頬擦りを――

ジョリっ

「うわあぁぁぁぁ！！」

全力で殴ったが一瞬炎が燃え上がり姿が消える。そしていつの間にかソファーに座りにこやかに手を振る翁朱がいる

「さ、遊ちゃん早く座ったら？」

絶対この人に勝てないと思いながら翁朱の隣ではなく向かいの龍御さんの隣に腰掛ける

龍御さんはジーパンに白のワイシャツ。超ラフスタイルなのに似合っている。流石龍御さん

「ん？遊思か。久しいな。鍛練を怠ってはいないな？」

「はい。ちゃんとやってまあぁぁぁぁぁっっ！」

首を後ろ９０。に傾けその上スレスレを通過する短刀【夜傘】

「なにしてるんすか龍御さん！危うく出血ですよ！て言うか死にますよ！」

「よいではないか避けたことだし」

澄ました顔でお茶をすする。駄目だ、やはり勝てない

「お～い佐我君、わし置いてきぼり嫌だな～」

校長の椅子に座るのは眼鏡に薄い頭部にややフサフサの側頭部。チョビヒゲの生えたオッサン。スーツより白衣が似合いそうなのが校長、余髪真鉄（よかみしんてつ）

「なんです校長？」

「うん。実は―――」

「お断りします」

「ハヤッ！わし何も言っとらんよ！実はですん止めじゃよ！」

「どうせ実技演習に参加しろって言うんだろ」

「ナイス推理じゃ佐我君！」

親指をグッとする校長
「成績上げるって言われてもお断りです」
そのまま親指は下を向いてグッとなる
「ね～遊ちゃんやってあげたら。ただですらこのおっさん人望薄くて頭も薄い引きこもり校長なんだし」
「グサ～～ッ！！」
退け反る校長
「女性教員に『生理的に嫌』と言われてるらしいしな。少しは慈悲をやったらどうだ？」
「グサグサ～～ッ！！」
ブリッチで痙攣する校長
「だってこの校長エロゲー15作品実名コンプリートですよ。しかも三日で」
「グッサ～～～！！！」
床に倒れる校長。念のため脈を調べたが一分で二回のペースでまだ生きている
「ちっ」
舌打ちした後改めて考える
実技演習をしてプラスになる事
1—鍛練になる
2—野郎共に釘を刺して今後狙われにくくなる
3—成績が上がる
実技演習をしてマイナスになる事
1—僕が玄武候補とバレる危険がある
2—龍御さんに血祭りにされる
3—翁朱さんに言葉では言えないような屈辱を味あわされる
4—断って帰ったら二人に言葉では言えないような惨劇を味あわされる

明白か
頭を下げ深々と溜め息を吐く
「わかりました。やりますよ実技演習」
そう言って校長室を全速力で抜け出し教室に逃げるしか出来なかった

「ん？ここどこじゃ？」
校長真鉄が目をさますと世界は反転していた
沈む夕日、空へと上り始める月。ああ、なんと幻想的で美しい

校舎と校舎を繋ぐ屋上の吊橋のど真ん中で逆吊りでミノ～ンになってる校長
おやおや、吊橋の端の方から何やらカタコトと音が聞こえるぞ？
それは江戸時代辺りから続くカラクリ人形です。小さな四つの車輪を転がし着々と校長の元に近付きます。
斧を確り握りながら
「ちょっちょっとまったカラクリマシ～ン！スタ～～ップ！」
ピタッと3秒停止して再始動。しかも遅れを取り戻すためスピードアップ！
「のぉぉぉ！ピンチじゃわし！（カタコトカタコト）止まれ！わしの心の叫びを聞け～！！（カタコトカタコトピタッ）ノォォォ～～振り下ろすな！振り下ろしちゃったらわしまいっちんぐじゃ！（ブオン！ブッツン）」

ああ、最後の命綱が・・・・・・
「Ｆｒｅｅｅｅｅｅｅ～～ｆａａａａａａａａａｌｌ！！！！！！！（自由落下）」

ドンドン加速する校長
おお！なんと下には緊急用の落下防止マットが張っているではないですか！なんと悪運が強い
「おお！これぞ神の導き！ハッハッハ～！わしはまだ死なんぞ～い」
マットに着弾！パキ～ン
「あっ・・・・・・」
そして壊れる金具！！
「そして再びＦｒｅｅｅｅｅｅｅｅｅｅｅｆａａａａａａａａａａａａａａａｌｌ！！！！！！！」
校長永遠に

そして所変わって悠さん宅の裏庭

源さんと組手の真っ最中。と言っても一方的に攻められてるのをひたすら防ぐのみ
「で、結局受けたのか。相変わらず苦労性だな～。よっ」
下段蹴りから右フックのフェイント、そのまま左手で胸ぐらを掴み腕力のみで軽々と宙に投げ捨てる
「仕方ないよ。断ったら帰ってこれないんだから。ってのあっ」
いつの間にか間合いを詰め回し蹴りを放つ源さんの足に一瞬手を添え無理矢理自分の位置を反らす
「よ～し前より成長したな。なら次の段階だ」
言うなり源さんは背中から黒い棒を抜き振ると警棒みたいに伸びる
「長っ！！」
2メートル近く伸びる警棒モドキは反応する間も無く僕の脇腹にメリ込む
「グゥッ」
そのまま裏庭に叩き付けられる
「は～いこれにて今日の授業は終了だ。生きてるな？」
いや、マジで目の前が暗くなりかけたよ。折れてはいないし痣もない。手加減はしてるんだが
「源さん・・・・・一週間魚抜きだ」
そのままグッタリと気を失った

ああ、実技演習心配だな

四話目☆ピンチピンチピ～ンチ（後書き）

心―くっ、まさか師と会うことになるとは
慎―ちょっと！はやくくっつけて！手とまだバイバイしたくない！
心―仕方ない。覚悟きめて手土産一つ持っていくか
慎―ええ！まさかの無視！早くして！（シュピーン）
心―少しは静かにしろ
慎―えええええええ！なんで俺自分の足見てるの～！！！うわ！
足バタバタして焦ってる！まだ生きてる！俺次回も生きてるの！
次回生きてたらまた会おうぜｗｅｅｅｅｅｅｅｒｅｅｅｅ！！
！ｂｙ慎！

五話目♪ランラン乱舞～（前書き）

慎―シャラハァァァァァァァァァァァ！！ひっさびさの慎だぜ！今回は悠さんに来てもらったぜ！

悠―初めまして。態々呼んで頂いて恐縮です

慎―あ・・・いえ、こちらこそ短い時間ですが宜しくお願いします

悠―あらあら、元気がないですよ？最初みたいな感じでいいんですよ？

慎―あ・・・いや・・・・・・その・・・・・・とっ！兎に角本編どうぞ

五話目♪ランラン乱舞〜

体育館は静寂に包まれていた

あちこちに飛び散る生暖かい血液、しかしそれらのモノは急速に冷え凝固していく

それらを入れていた器となるヒトと呼ばれる存在は既にヒトではなくモノとなって体育館中に転がっている

血と脂肪に塗り固められた刀を握る女性

時永龍御

「惨めだな佐我遊思。お前の玄武としての器はこの程度か」

飛び欠ける意識を繋ぎ合わせ閉じることも出来ない瞳で突きつけられた刀を見据える

滴り落ちる血に染まった脂が視界を紅く染める

「惨めな玄武。もう終りにしましょう」

全てが闇に飲み込まれた

「って何のっけから嘘の塊を放送してるんですか！いくら暇だからって態々録音してまで長々と語らないで下さい！しかもカセットテープで！」
「何馬鹿を言っている。最新の機械だぞ。見ろ、これ一つで録音以外に再生が出来るのだぞ」
心底当たり前の様に発言する龍御さん
すると肩を叩く人が
振り向くと乙我翁朱さんはちょっと哀れな生物を見るような悲しい目で
「ほら、龍御ちゃんの御師匠さん文明改革後退委員会とか訳分かんないの発足させたじゃん。それに龍御ちゃんって街とか一回も行ったことないから・・・・・・・ね」
遠い目で校長室の窓の外を見つめる
「翁朱さん、現実から逃げないで下さい」
「ほら龍御ちゃん、これあげる」
それは小さな携帯ゲーム機で画面の中では四方ブロックに囲まれたステージ。危険物の資格も待たない主人公（円が二つ重なった様な物体から手足が生えた生物）が爆弾（丸くて導火線付き）を設置して風船に顔を描いた様な可愛らしい生物（主人公は紙より脆く触れるだけではち切れる）や鶏擬を焼き殺してその区域を制覇するゲームだ
「最新のゲーム機だよ」
とんでもない嘘を平気で言っちまう翁朱さんを無視してみた
「おお！ゲームがこんなに小さくなったのか。しかも白黒の他に若干灰色と緑も混ざってる！」
心底嬉しそうにゲームを始めた龍御さん
ピポ～ンと気の抜ける音と共に始まったゲームに悪戦苦闘する龍御さん
僕と翁朱さんは並んで校長室の窓の外を眺める

「翁朱さん・・・・・僕は余り表現豊かでは無いので言葉が出てきません。人格洗脳とか文化否定とかこれっぽっちも浮かびません」
「私もよ。昭和の生きた遺産とか旧式現代人とか全然思い浮かばないもん」
後ろでは相変わらず悪戦苦闘し続ける龍御さんだった
「このっ、こしゃくな。走れ白い丸！あああ！破裂してしまった」

体育館にて

二学年一同はもの凄いプレッシャーの中で耐え続けといた
何故なら実技演習が始まるのにゲームを離さない龍御さんから無理矢理翁朱さんが奪ったのでかなり御機嫌斜めなのだ
「そ、それではこれより実技演習を始めます」
司会の女の子は言い終わるなりダッシュで人混みに消えた

チラッと心を見てみたがマジで震えていた
仕方ないので龍御さんだけに聞こえるように小声で
「これが終ったら新しいゲーム買ってあげますから機嫌治して下さい」

「本当か！？」
「はい。キノコを食べると大きくなる特異体質の髭オヤジが大地を駆け回るゲームで攻撃が踏むと焼き殺すの二種類に増えた最新ゲームです」
神様ごめんなさい。僕は世間を知らなすぎる２１歳のお姉さんに大きな嘘をついてしまいました
「本当か！？攻撃が二種類にもなったのか！よし、さっさと終らせよう」
満面の笑みは僕のピュアハートにワルサーＰ３８の鉛弾を零距離で放った並の痛さだった
「ふむ。それでは早速授業と行くか」
先程の殺気に近いプレッシャーが無くなりホッと胸を撫で下ろす二学年一同
「よしよし、それじゃ～簡単に基礎知識から」
翁朱さんは移動式の黒板に『攻』『守』『特』と書く
「二学年にもなれば解ると思うけど私達のローレスはこの三つのどれかに該当するの。隣の龍御ちゃんは『攻』。私と佐我君は『守』」
「そしてホデリ日本支部代表の悠様と四聖獣白虎の丕蔵技殿が『特』に部類されている」
「他にも攻守を持ったローレスや攻と特。守と特みたいな感じのローレスも確認されてるの」
大半の生徒がへ～とかほ～とか言ってる。実際僕もそこまでは知らなかった。攻守のローレス。恐らく僕の黒翼はそこに部類されるだろう
「ついでに補足するけど純粋に攻一点とか守一点とかはほとんど存在しないの。大概大小二つの力を持ってるのよ」
翁朱さんは黒板の字をキョキュ～と消してサイコロを転がす
「え～っと・・・・Ｄ組の３２番さ～ん」
皆の視線はＤ組の３２番一点に注がれる
「ほう、心か・・・・久方振りだな」

「お久し振りです師匠！御元気そうで」
ガチガチになりながら頭を下げる心に笑いながら近付く龍御さん
「相変わらず堅苦しい挨拶だな。もっと気楽にしたらどうだ？」
「いえ・・・・まあお久しぶりです龍御さん」
「師匠に敬語を使わんとはいい度胸だ。よし、今すぐ成敗してくれる」
うわっ、超理不尽！
心は直ぐ様クラスの中から飛び出し龍御さんとの距離をとる
しかし龍御さんのローレス、【縮空】（しゅくう）には関係の無い事だ
己が相手の気配を察する事が出来れば距離、障害物を無視して攻撃が出来る。簡単に言えば鉄でもチーズみたいに斬れる超ロングな刀を振り回してると考えてもらえば簡単だろう。もっともその肯定内に有る障害物は無傷で相手のみ斬る最悪に部類するローレスである元々の剣技の素質にこの力を持った龍御さんは歩く凶器そのものだ心もひたすら避けたり弾いたりしながら近付いてはいるが無駄だろう。何故なら四聖獣クラスやその下、『八又』の人間は力を完璧に扱える。そして今の龍御さんは段階１の力しか解放していない
「心、少しは修練の成果が出たらしいな」
ぶつかり合う金属音に乗せ語り続ける龍御さんは焦点の定まらぬ目で斬激を繰り出す（段階１の代償は一時的に視覚を失う）
「くっ・・・・、速すぎる。しかし！」
ギリギリで避けた心は身を低くし一気に間合いを詰める
「ほう、避けたみたいだな・・・ん！」
耳に微かに聴こえた空を切る音。心は避けると同時に鞘を投げていた
龍御は体を少し反らし鞘を避ける
しかし心はその一瞬を見逃さず下段から振り上げる
「参る！」
刀が龍御さんの衣服に触れ、そのまま吸い込まれるように皮膚に食い込む

「合格だ」
筈だった
しかし気付いた時には１０ｍ近く離れた体育館の壁に寄りかかる様に心が倒れていた
肩、脇、膝、腕等あらゆる場所の衣服が千切れ、心は気を失っている
誰もが今の状態を理解出来ていない。ただ唖然としていた
いつ見ても恐ろしい
龍御さんの段階２の力『縮時』（しゅくじ）
攻撃をする場合必ず発生する時間。それすらも越えて相手に攻撃をする力。代償にしばらくの間視覚、聴覚を失うのだ
「あらら、心ちゃん大丈夫かな？」
駆け寄った翁朱さんは大きいタオルを取りだし心に被せる。そして近くにいた女子生徒に保険室へ連れてくよう指示を出す

龍御さんはと言うと目と耳が使えないのでさっきから僕の背中にしがみ付いている。いや、離れてほしい様なほしくないような・・・・・柔らかい感触が背中に・・・・・
すると手を叩きながら翁朱さんがこちらに歩いてくる
「はいは～い。これから皆には三チームに分かれてもらうから。攻は龍御ちゃん、特は私、守はゆうちゃんの所に並んでね～。質問はある？」
すると一人の生徒が手を上げる
「なんで佐我がそこに立ってるんですか？」
「うん。ゆうちゃんは四聖獣の玄武だからよ」・・・・・・・・・・ん？
『・・・・・・え？』
「・・・・・・あ」
・
・・

・・・
・・・・

『えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！』
「コォォノォォ・・・カマ野郎ォォォォォォォォ！！！！！！！」
「あぁぁぁぁ！ゴメンゆうちゃ～～ん！」
「許さんよ！久しぶりにひっぱたくよ全力で！【陽炎】使うの禁止だからね！素直に懺悔してよカマ野郎！」
「ごめんゆうちゃん！ついうっかり口が滑って・・・・・てへ♪」
「キモイんじゃァァァァァァァ！」
全力疾走の鬼ごっこで体育館中走り回る大人気ない二人、そしてザワザワとあれこれ勝手な推測をする二学年
龍御さんは視覚、聴覚共に回復したのでさっきからにこやかに眺めている

その時一人の女子生徒がある疑問に気付いてしまった
「ねえ、カマ野郎って・・・・・もしかして翁朱さんって男？」
「えぇ！翁朱さんってオカマなの！」

急に立ち止まる翁朱さん、そして異常なオーラが体中から溢れてくる・・・・・まさか！

「お・・・・おうしゅ――――」
しかし言い終わる前に翁朱さんは消え、女子生徒の短い悲鳴が聴こえた

「ねえ・・・・私がなんだって？」
「ひっ！」
ガタガタと震えながら身を寄せ合う二人の女子、しかし翁朱さんの眼には情け容赦の文字はこれっぽっちも見当たらない
「もう一回言ってみてよ・・・私がなんだって？私が実はなんだって？」

これから始まるのは学園史上最初のハルマゲドンである

語り手―佐我遊思

次回、『ハルマゲドンの恐怖』に続く

続く！！

五話目♪ランラン乱舞～（後書き）

慎―・・・・・・・・・・・・・・・（押し黙る）
悠―・・・・・・・・・・・・・・・（ニコニコ）
慎―あの・・・・・
悠―なんです慎さん？
慎―いや・・・・何と言うか・・・・どうでしたかここに来て？
悠―とても楽しませてもらいましたよ。本当にありがとうございます
慎―あぁ！頭をあげてくださいよ！そんな腰低くしなくていいです！もっと強く来ていいですから、そんな敬語使わなくていいですから！
悠―でも、御呼ばれして頂いた身ですしそんな失礼な事出来ませんもの

くっ、前の連中が強すぎてギャップに耐えれない！次回は精神崩壊してるかも・・・・生きてたらまた会おう！
ｂｙ慎！

六話目∞バリバリ最凶ナンバー1！（前書き）

慎「超絶おひさぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！皆のアイドル慎さんの登場だぁぁぁぁぁ！」

源「うっさい糞ガキだなおい」

慎「だって262日ぶりだぜこのお話」

源「作者万死だな。ったく使えね～アホだな」

慎「ホンとにな。世界に謝れ！」

作者「本当にごみんなさい」

慎・源「クォラァ！」

六話目∞バリバリ最凶ナンバー1！

空気を切り裂く刃は吸い込まれる様に相手の死角を攻める
しかし紙一重の差で体を捻り脚に力を込め宙を踊る

１０m近い距離を跳ぶ翁朱さんは恐いくらいの笑顔で相手を見据える
龍御さんは刀を下段で構えゆっくり姿勢を低くする
「いい加減にしたらどうだ。たかが学生の戯言だぞ」
「んふふ、そんなの関係無いわよ。誰であろうと言った奴は○○○で×××で（ピーピー）な（バキュ～ン）にしなきゃ気が済まないもん」
女子生徒はもう気を失ってひっくり返っている
僕としては非常に関わりたく無い状況に置かれており、今すぐ教室に帰りたいの一言である
しかしチリほどの責任も無いと言えないのが現実。だから仕方なく命賭けの説得をするしかないのだ。まずは手始めに
「翁朱さん！落ち着いてくださ～い」
「ゆうちゃん黙ってないと噛み切っちゃうよ♪」
うわ！スッゲーこえ～
その一瞬の隙を見逃す事無く龍御さんは踏み込んだ
間合いを無視した斬撃は翁朱さんの死角を完璧に捕えている
しかし翁朱さんにとって奇襲や不意打ちは余り意味を成さない

翁朱さんの力【陽炎】。一段階目では相手が自分に敵意を持った攻撃をした場合、絶対的に回避する。二段階目では相手の攻撃に敵意が無い場合
陽炎はこの二つしか能力を持たないが、切り替えを間違わない限りまず負けない力なのだ

全身が歪み炎が燃え上がり翁朱さんは消える

そして現れたのは龍御さんのすぐ隣
「無駄だよ。龍御ちゃんも分かってるでしょ。決着つかないって」
「だがお前を止めねばなるまい」
「ん～～。私はただあの子を（バキュ～ン）したいだけなのに♪」

もう恐い
しかしやらねばいかんのか。すっごい嫌だな
僕は未だに高速の斬撃を繰り返す龍御さんと消えては龍御さんの近くに現れナイフで斬りつける二人の間に飛込む
「いい加減にしてくださアァァァ！」
二人に殴られて綺麗な弧を描き壁にぶつかった
致命傷は無い。さして痛くもない。たが恐い
あの二人の眼が殺意でギラギラしていた

「貴様！いい加減遊思にベタベタするのは止めたらどうだ！」
「龍御ちゃんこそちょっかい出してるじゃないのよ！」
「なんだと！今日こそ貴様を葬ってくれる」
「そっくりそのまま返してやる～！」

あれ？戦闘経緯が変わってないかな？

「龍御さ～ん、翁朱さ～ん。やめてくれませんギャハァッ！」
見えない斬撃は見事にヒットして又々吹き飛ばされる。今度は隣の倉庫に転がりこんだ
跳び箱からなんとか起き上がり倉庫を出ると今まさに必殺の一撃を放とうと構える龍御さんがいた。ってやば！
「伏せろぉぉぉ！早く伏せろぉぉぉ！」
全力で走り一番近くに立っている男を蹴って人間ドミノ倒しをする。
それからまだ伏せていない連中の前に立ちはだかる
「ゆうちゃん！何があるの！」
「頭下げろ！死ぬぞ！」

龍御さんは腰を落とし腰に吊る長刀【龍崩】（りゅうほう）を抜き放つ
「吠えろ龍崩！居合い術奥技、斬幻洸！」

一瞬の斬撃が体育館に拡がる。龍御さんを中心に居合いの領域を超えた一撃が放たれる

居合い術、斬幻洸

その場で円を描き周囲の物を切り裂く一撃であり、龍御さんの『縮空』を最大限に発揮する技である。全てを切り裂く一撃は体育館の壁を容易く抜け、一部を除き貫通する

そしてその一部に立っていたのは僕だ

数メートルの距離からの一撃をなんとか受け切った。改めて白銀の力に感謝したいよ

「でも流石にキツイな・・・・・」
額に青筋を浮かべる僕はゆっくり身構える

「・・・・・・ゆう・・・・ちゃん？」
「美樹、少し下がってろ。そろそろ限界だ」
もう抑えれない、黒く染まる心は昔の俺を呼び覚ます

「いい加減にしろよテメ～ら。ガキじゃあるまいし」
ボロボロの制服を脱ぎ両袖を掴み弧を描く
「白銀Ｌｖ２・・・。銀の洗礼発動」
銀の洗礼。己が触れている物に対して自分と同等の効果を与える力

「仮にも青龍と朱雀の癖にくだらね～事で暴れやがって。クソ馬鹿野郎共が！」
地を蹴り低姿勢で接近し、横薙に刃と化した上着を振り抜く
突然の攻撃に驚きながらも交戦を止め跳び退く
「ユウちゃん！どしたの急に！」
「黙ってろカマ野郎！おとなしく斬られろ！」「遊思！何を急に逆上している！少しは落ち着いたらどうだ！」

「龍御！いい加減少しは街に出ろや！二十歳過ぎて男と手を繋いだことも無いとか抜かして毎晩テトリスやってんじゃね～！」
「何故知ってるのだ！」
うるせーと言い返し偃月刀の様に曲がる制服刀を元に戻し袖を通す

「親父が言ってたよ。青龍と朱雀を止めるのは玄武の仕事だってな。だから本気で止めるぞ。殺す気で行くからな」

大きく息を吸う

「まずはカマ野郎！テメーだ！」

単純に接近し単純に殴る。それだけだが俺の場合拳は鉄以上の硬度に相当する

「わわわわぁぁ、ユウちゃんマジだぁぁ！」

ギリギリの回避を繰り返し逃げ回る翁朱

「さっさと殴られろや！完全に黒に染まっちまうだろが！」

壁際に追い詰めた翁朱に渾身の回し蹴りを放つ。それを陽炎で回避さ翁朱は龍御の隣に逃げのびた

「龍御ちゃん！何あの威力、壁がスッパリ斬れてるよ！」

「あれが本気の遊思ということだろう。殺らねば殺られるぞ！」

龍崩を構えた龍御は一瞬で遊思の後方に現れ袈裟斬りに刀を振り抜く金属のぶつかる音と共に遊思は低姿勢の足払いから腹部目掛けて蹴りを放ち、龍御は刀を添え合気の要領で力を分散させ後方に跳び退く

「いつまで時代を逆行すりゃ気が済むんだ！今ゲームはＣＤの時代だ！」

「嘘を言え！ＣＤは音楽を聞く道具だろうが！」

よく分からない叫びと共に龍御の斬撃は全て死角から遊思に直撃し、遊思は全て耐え、尚且拳を突き出し脚を払い続けた

生身と刀で響き合う金属音に震える生徒達と何処かに電話する翁朱

しかし金属音は急に止み、壁をぶち壊す派手な音が体育館に広がった

少し乱れた息を整える様に深く深呼吸する龍御

いくら表面が鉄以上であっても内は人と変わらぬ。ならば内を攻めればいい

龍御の師に叩き込まれた打振。内に衝撃を叩き込み内部から破壊する荒業の一つ。いくら手加減しても相当の威力になるのが扱い辛い点である

「はぁ、少しは応えただろうな。落ち着いたか遊思」

瓦礫の山からゆっくり起き上がる遊思

頭を二・三振り埃を払い制服の埃も手で払う

何故我慢する？

僕が耐えなきゃいけないからさ

何故耐える？

それは・・・・

自分の為に生きて何が悪い？自分の人生を生きるだけだぞ

そうだけど

周りが俺を傷付けるんだ。何もしてないのに結局最後には俺が何とかしなきゃいけないんだぞ？何故だ？

・・・・・・・それは
我慢する必要はないんだ
・・・・・・・何故？
俺の人生だからさ

「我慢する必要は無いんだ。俺の人生だから」
「ん？」
遊思の変化に疑問を持つ龍御。今まで放っていた敵意が全く感じない
逆にそれが威圧に感じている。まるで氷の様に冷たく静かだ

「龍御さん、一ついいですか？」
「な、何だ」
「取り合えずくたばって下さい」
ゆっくりと距離を縮め五指を鳴らす遊思。指を壁に添えスッと引く
とそこには壁をえぐった爪痕が残る
龍御は直感的に後方に飛び退く。しかし遊思は急ぐ事なくゆっくり
歩いてくる
「龍御ちゃん、かなりヤバくない？」

「ああ。少々羽目を外しすぎた。生徒を退室させる。今の遊思は完全に黒翼だ」

生徒を退室させるのにさして時間はいらなかった。皆が一斉に逃げ口々に白髪鬼と叫んでいた

「こら、早く去らぬか！相手は黒翼だぞ」
「嫌です！ユウちゃんをほっとけないもん」
美樹は必死だ。しかしどうにかなるレベルではない
「下がってなさい美樹ちゃん。今のアナタじゃ足手まといだから」
美樹を手で制する翁朱さんはにっこり笑う
「必ず止めるから今は逃げなさい」
美樹は何かを言おうと口を開いたが結局何も言えずに体育館を後にした

「待たせたな黒翼」
剣先を向け身を低く構える龍御とゆっくりナイフを構え柳の様に揺れる翁朱
「黒翼ですか・・・ならその名に従って行きますか」
軽く手首を動かし相手を見据え歩き出す
すると突然遊思は身を低くし、床に爪を食い込ませる
「翔べ、黒き翼よ。飲み込め。全ての命を」

四肢に力を込め弾け翔ぶ。床に深い爪痕を残し空を駆ける
大きく跳躍し、壁を破砕して二人に突撃する
二人を左右に飛び退き龍御は懐に潜り込み打振を叩き込む
手加減無しの一撃は軽く臓器を傷付ける
そしてその威力を知っている龍御だからこそ完全に油断していた

「龍御さん。貴女は知らないみたいですね。黒翼のＬＶ２を」
重い裏拳は龍御の側頭部を殴り付ける
鈍い音と共に龍御は短い悲鳴をあげ床を転がる

「龍御ちゃん！」
翁朱は素早く龍御の元に飛び抱き起こす
「ぐっ・・・何故だ。打振わ決った筈だ」
「ええ。手加減無しの一撃でしたね。でも駄目なんですよ。『白銀』が強くなると同時に『黒翼』もまた強くなる。だから一度も黒く染まらなかった父しか知らない貴女は油断した」

黒翼ＬＶ２〈厄災の転換〉

あらゆる物理的攻撃は受けた表層のみに与える
あらゆる物理的攻撃以外のモノは己の命を代価とする

「だから僕は貴女の打振。内を壊す力を黒翼で守られた部分で受けたんですよ。そして僕が貴女を殴った時、元の能力の副作用、相手と同じダメージを負うので僕の寿命は減った。それだけです」
「ぐっ、それだけだと。自分の寿命が減ったのだぞ」
「別に一年も二年も減ってませんよ。大体2ヶ月程度ですから」
遊思は冷たく笑い地を蹴る。宙を舞う黒き翼は拳を構え全力で振り下ろす

翁朱は龍御と共に寸前で避け、庇う様に遊思の前に歩み寄る
「ユウちゃんごめんね。私があんなことしちゃって」
「気にしなくていいですよ。ただ死んでくれればいいだけですから」
刃物の斬れ味を持つ回し蹴りは紅の炎に包まれる空を切る
「私とユウちゃんだと決着は着かないよ。だからやめよ？」
「素直に従うと思いますか？」
「無理だよね」
悲しそうに笑う翁朱は素早く身を翻し龍御の腕を掴み何の躊躇もなく逃げた
遊思はゆっくり後を追うため歩き出そうとした瞬間通路から別の影が歩いてくる
「いよう遊思君、元気じゃったか？」
「消えろ。空間が腐敗する。今すぐ星へ帰れ」
「ブラック全快じゃなぁぁぁぁ！ワシ泣くぞブラック遊思君！」
「消えろ」
校長はその場で嘘泣きを始め、懐から取り出したフィギュアに愚痴っている。キモさ１００倍だ
「なあ遊思君、少し落ち着いてくれんかのう。ワシだって手荒には事を済ませたく無いんじゃよ。頼むからワシに力を使わせんでくれ」
「そんな事知りませんよ。邪魔です」

遊思は校長を無視し歩き去ろうとする
校長は深く溜め息をつき、遊思に一枚の紙を投げつける

「！！！」

気付いた時には爆音と共に、体育館の端から端へ吹き飛ばされ、壁に埋もれていた
「遊思君。君はワシの力を知らんじゃろ」
忽然と目の前に現れたのは校長、余髪真鉄は二枚の紙を投じる
今度は先程より更に高い音、金属同士をぶつける音が体育館中に拡がる
紙を投じる度に爆音が響き、遊思の体を穿つ

幾度と響く音が止むと気を失う遊思とやたら髪を気にする校長がいた

「あぁ・・・また少なくなってしもうた」

己の頭髪を縛った紙に書かれた文字に力を与える【神名権（しんめいけん）】本来、
誉髪家の血族は常に女性が産まれる一族であり、髪に力を持つ女性だからこそのローレスなのだ
だが男である余髪真鉄が神名権を使えるのには特殊な理由があり、紛い物と己に示すため、余髪と名乗っている

「ふう。ま、いい勉強になったじゃろ。八又一頭首、余髪真鉄を舐めたらいかんよ」
校長は無駄な笑いを残し体育館を後にする

そして間もなく現れた源さんにしこたま殴られ家に連れていかれた

夢見る少年は父を見る

いつも笑っていて真っ先に自分を盾にして全てから自分と母を守る

憧れの父を

汚れ無き輝く盾を持つ偉大なる父を

六話目∞バリバリ最凶ナンバー1！（後書き）

慎「ひっさしぶりなのに源さん最後しか出なかったね」
源「あの野郎いっちょ消すか？変身！」
慎「ギャァァァァ！化け虎！」
虎「ガァァァァァァァ！！」
パリ～ン
慎「そろそろ修理費バカにならないから玄関から帰れ！」
作者「クリスマス編恋愛小説始まったよ。良かったら読んでねぇ～」
慎「クォラァ！」
虎「ガァァァァァ！」
作者・慎「ギャァァァァァァァァァァァァァ！」

マジで生きてたら来年会おうぜ、約束だ！ｂｙ慎

七話目：僕と年上と時々勘違い（前書き）

慎「やっほ！我等のアイドル慎君だ！」
龍御「なあ小僧、これはなんだ？」
慎「ちょっ！ちょっとマイク握り潰さないで！」
メキョ
慎「うわ行きおったこの姉ちゃん」
龍「な・・・これ・・・・・・だ」
メキョ
慎「うわぁぁぁぁ！取り敢えず先進んでぇぇ！」

七話目：僕と年上と時々勘違い

あれから数日たった。僕はまぁ・・・・・久し振りに皆から威怖の対象としてかなり距離を取られました
仕方ないってのは分かりますよ。でも久し振り過ぎて泣きたいです
「ゆうちゃん。ゆ～う～ちゃ～ん」
なにぃ？
「泣きすぎだぞ遊思。ほら、使え」
ありがとう心。明日洗って返すから
「い、いいぞ態々洗わなくとも。そのまま返して結構だ」
「きぃぃ！心かくごぉぉぉ！トリャァァァ！」
「五月蝿いぞ赤子が！」

ズゴーンバゴーンシャキーンシュキーン
あぁ、二人を止めなきゃ

へこたれたまま家に着く。後輩の殆んどに半泣きで頭下げられながら帰る通学路程苦しい道は無いもんですよ

「ただいまぁ」
玄関に踏み込むと見たこと無い靴が並んでいる。悠さんのお客さんかな
部屋に戻り着替えを済ませ居間に向かう

「邪魔しているぞ遊思」
・・・・・・え
「何しとる遊思。入るならさっさと入れ。悠様が夕飯の支度しておる。さっさと手伝いに行け」
いやちょっと待てよ
「どうした遊思。私の顔に何か付いてるか？」
「龍御さん。何故貴女が此処に居るんですか？」
「迷惑か？」
「いえ全然全く問題ありませんだから刀持ち出さないで下さい勘弁してください」
「分かればよろしい」
何故でしょうか。龍御さんの龍崩の切れ味が増した気がするんですが

疑問と恐怖に挟まれながらいそいそと悠さんの手伝いに回る
「今日は天ぷらですか。え？ぶどうの天ぷら？駄目ですよそんな冒険。巨峰だからって冒険しなくていいですから。泣き真似でも駄目ですよ駄目ですって（ジュゥゥゥ）・・・・源さんのお皿にしてくださいよ」

「所で龍御さん、何の用だったんですか？」
「ああ。今週の日曜は空いているか？」
「日曜？取り敢えず何も予定は無いですが」
すると龍御さんは何故か笑顔でうんうんと頷く
「日曜に街に行くぞ。案内してくれ」
・・・・・・・・勘弁してくださいよ
「おい遊思・・・胃薬・・・・なかったか」
「ごめん。もう無い」
「マジか・・・・ふのぉぉぉ！」
猫化した源さんは颯爽と夜の闇に消えた
龍御さんの御師匠さん。僕は真実を教えます。恨むなら街に興味持った龍御さんを恨んでください

日曜日――ＡＭ５時２５分
龍御さん来客

「早すぎですよ。今何時だと思ってるんですか」
「外はもう明るいぞ。何時までも寝ておる」
ぐぅ・・・・・
「・・・・・・せいっ！」
首関節やられたした

廊下で悶絶する僕を軽々担ぎ部屋に郵送。ベットに投げられ椅子に腰掛ける龍御さん
「ふむ。これが遊思の部屋か・・・・おぉ！何だこれは？」
龍御さん、そんな乱暴にコンポを叩かないで下さい。高いんですよ
「おおテレビだ。しかもカラーだぞ！最新じゃないか」
それ五年前のですよ。ああもうチャンネルカチカチし過ぎですよ
「楽しみだな。街はどんな物があるんだろうな」
２０にもなって椅子で回らないで下さい。ほら倒れた。痛い？当たり前です

さていざ街に行こうと思ったんですが何を気違いを起こしたか知りませんが徒歩で街まで行く気ですこのお姉さん
「龍御さん、電車で行くんですからね。走りじゃないですよ」
「電車？ああ、あの走る箱か。山を越える時稀に見掛けるな」
御師匠さん、貴方の歪んだ思想が２０の女性の人生を狂わせてるんですよ
「しかしあの箱より走った方が速いぞ」
化け物ですか貴女は
とまあ驚愕の事実を知りつつ駅に到着です。いい歳して電車にウキウキしないでください
間もなく到着した電車に乗り込み目的である街に到着しました
「ほう、此処が街か。うむ、人が多いな」
「平日でもそれなりに混みますからね」
「つまり暇人が募る場所というわけか」
「そうです」

あ、街の皆さんごめんなさい。これといった意味は無いですから
「よ～し早速行くぞ！」
待って下さい龍御さん、龍崩はしまってください。警察の方がこっち来てますから
眼で訴えると龍御さんは理解したらしく、一瞬で二人の警官を路地裏に引きずり込み何事も無く龍御さんだけが出てきた
僕知りませんからね

先ずは手始めにショッピング。日本を代表する四聖獣ともなると御国からお給料貰えるみたいなんですよね。僕はまだ見習いみたいなもんだから少ない額ながら悠さんに預けられてるそうです
「みろ遊思、勝手に戸が開くし床が動いてるぞ」
「龍御さん御願いだから黙ってください。なんか涙込み上げてくるんで」
明治か大正を生きてきた人なんだろうか。洗脳の恐ろしさを垣間見つつ向かうは某有名服屋です
二十歳で背も高くてスタイル良いんですから少しはファッションにこだわって下さい
「うむ。しかしこの格好が一番体に馴染むんだがな」
「いやまあ何着ても似合うと思いますよ。スカートとか着ないんですか？」
「あまり好かんな。動きやすいが何かこう・・・スースーする」
いいですから。態々ジェスチャーしなくていいですから。見てるこっちが恥ずかしいですから。がに股はタブーですよお姉さん
周りの視線が集まる前に適当な服を二、三着取り更衣室に入れる
「なあ遊思よ、お前はこんな服が好きなのか？」
「聞こえようじゃマニアックな服選んだみたいに聞こえるから止めて下さい」
僕が選んだのは落ち着いた色合いのロングスカートと薄いカーディガン。チョイスとしては間違って無いですよね？

程なくカーテンの向こうから現れたのはもう気品溢れるお姉さんです。元が良いと何着ても似合いますね
「ふむ。どうだ？」
「素晴らしく似合ってますお姉さん」
「お姉さんか。ふふ、悪くないなその呼び名」
悪戯っぽく笑う龍御さんはそのまま会計を済ませ（僕が無理に頭を下げました）次はちょっと喫茶店に寄り道
和菓子専門店って渋いな龍御さん。嫌いじゃないですけど
渋いお茶と甘い菓子。本当日本人で良かった
二人並んでほっと一息
「遊思、街とは中々面白いものが並んでいるな。床が動くし」
「エスカレーターです。あっちはエレベーターですよ」
「ふむ。師匠から『発展し過ぎた文明に触れると魂を吸われる』と散々言われたが信憑性が薄れてきたな」
御師匠さん。貴方はこんな純粋無垢な龍御お姉さんになんて仕打ちをするのですか。洗脳すら生温い悪行ですよ
二人でゆっくりお茶を飲む。美味しいな

「んぁ？遊思じゃん」
そんな僕の前を見知った人が通る。見覚えある天パだな
「渉じゃないか。どうしたこんな所ぶらついて」
「いや婆さんに買い物頼まれてよ・・・・つか御隣のお姉様誰？」
あぁ、この姿じゃ龍御さんって分からないか
「初めまして渉さん」
「ズキューーン！」
龍御さん、ふざけないで下さいよ。渉はチキンハートなんですから
「遊思君。面白い方ね」
「おい遊思！めっちゃ美人じゃね～か。脈あり？脈あり！」
哀れだよ渉。君は遊ばれてるんだよ。現実に戻しますか
「小百合さん」

ボソッと呟くと顔面蒼白になる天パ。チキンハートは辺りを見回し物陰に隠れ更に周囲を警戒している
「遊思、俺、帰る」
床がグニャリと曲がり空いた空間から下に消える天パ。逃げ足早いな
「くくく・・・中々面白い少年だな。しかし小百合と言った途端消えたが・・・知り合いか？」
「小百合さんは一つ上の先輩で渉の彼女ですよ。超嫉妬心強いドSですけど」
ここで更に詳細を説明しますが特定の女子（美樹や心等）以外と話すことは一切禁止。更に触れた場合悶絶必死である
まあ彼の場合常にオートポーションでダメージすぐ回復するんで小百合さんにとってもいいストレス発散になるんでしょう

「まあよい。どれ、次の店に行くとするぞ」
山程土産を持たされた。御師匠さんのお土産だそうです。なんて師匠さん想いなんでしょう

「こんにちは～。あ、悠さん。ユウちゃん居ますか～？」
「あらこんにちは。遊思さんでしたら時永さんと街に出掛けていますよ」

・・・龍御さんと街に？
二人で街に？・・・・・二人でデート？

「御免下さい。遊思は居ま・・・・・何故赤子が居る」
ユウちゃんがデート
ユウちゃんがデート
「おい赤子。此処は自分の家では無いのだぞ。無闇に棚を握り潰すな」
「心・・・・出掛けるよ。鬼退治に」
「何戯れ言を言っている。話が読めん」
鬼退治～鬼退治～
スケベ白髪の鬼退治～
「ユウちゃんが龍御さんとデートしてるって」
「何をグズグズしている。急がねば電車に乗り遅れるぞ」
白髪鬼討伐隊結成！

あ、すいません。場所取ってますよね。今寄せますから
「どうした遊思。我が家の様に食器を片付けて。店員が下げてくれるぞ」
「テーブル一帯を占拠した食器を片付けなきゃ次のが並べません。つか食い過ぎです」
ああもう４００ｇハンバーグセット三皿目ですよ。あ、すいません。食器返します。大丈夫ですか？棚に乗りそうに無いからもう一度お

願いします
「うむ。美味いな遊思。お前もどんどん食べろ」
「いえ、見てるだけでお腹一杯です。僕はパフェでも食べてます」
後3分もしたら次のオーダーしとかないと

そんな二人の席から死角の席に座る白髪鬼討伐隊はアイスをつつきながら偵察中である
「むむ～。どう見ても龍御さんじゃないよね？」
「ああ。師匠があんな格好するとは思えん」
「それにしても食べるね。ものすっごい量なんだけど」
「同じ女とは思えんな。遊思はよく食べる者の方がいいのか」

『・・・・・・・』
ピンポーン
「スパゲッティーセットとイチゴパフェ」
「至急和風おろしそバーグと抹茶ソフト」

ピンポピンポーン！
「ナポリタンとツナポテサラダ！」
「大至急鮭定食と胡桃と苺のタルト！」

「ふむ。中々美味だった。初めて食べるものばかりだったぞ」
そうですか。ウエイターの人も引きつってましたよ。ファミレスで一人一万近く食べてますからね

「時に遊思、気付いておるか？後ろの者に」
「美樹と心ですか？あれが尾行なら世界の探偵業は楽なもんですよ」
電信柱の影から新聞を盾にし、穴を四つ開けてそこから覗き込む哀れな二人組。いや、寧ろ二人の間に小さいながらも友情が芽生えた事を褒め称えるべきか
「ふむ。少し二人で遊ぶとするか」
言い終わるなり僕の腕に自分の腕を絡める龍御さん。辞めてください、僕より身長ある人がそんな事すると物凄いバランス悪いんですから
「だが満更でもあるまい？にやけておるぞ」
「僕も男ですから」
男は弱い生き物なんです

後方でコンクリートが砕ける音がするが龍御さんは気にする事なく首に腕を回して引き寄せます
「龍御さん・・・・勘弁してください」
「まだだ。後の二人が出てくるまで待て」

「後数秒もしない内に突撃してきますよ。早めに離れてください」

数m後方で大地を揺るがす第一歩が聞こえた
咄嗟に振り返り龍御さんを庇う
「さあ遊思。お前の技量見せてもらおうか」
それが目的ですか
真っ先に目に飛び込んで来たのは美樹のソバット。電柱位なり多分へし折るだろう

咄嗟に腕で顔を守り地を蹴る。腕に軽い衝撃と共に吹き飛ぶ。咄嗟に地面に指を引っ掻け急停止、直ぐにその場から飛び退く。店に突っ込まなくて本当によかった
間髪を入れず頭上から刃の嵐が降り注ぎ、さっきまで居た場所に無数の穴を開けた
素早く体勢を調え分かりきった相手を見据える
「ゆうちゃん覚悟ムグムグムグ」
「命乞いはモグモグ認めぬぞハフハフ」
フランクフルトを三本とクレープをパクつく美樹とたこ焼きが予想以上に熱くてちょっと慌てている心
「・・・・・何してんの？君等そんな食べ歩きして」
『いいの！』
食べ終えた串を全力で投げつけられた
「遊思、隣の女性は・・・・・師匠か？」
隣から物凄い覇気を感じる。言ったら駄目か
「初めまして。時永さんの同級生の遊麻です」
声色変えてまで騙したいんですか？
「それでゆうちゃんとどんな関係なんですか！」

龍御さん改め遊真さんは何故か頬を紅く染めお腹に手を当て愛でるように撫で僕に熱い視線を送ってくる
・・・・・社会的に僕を抹消したいんですか？
あの二人はとても純情なんですからそんな下手な芝居にすぐ引っ掛かるんですよ
ほら、二人供驚きのポーズで硬直してるよ

「遊真・・・・あの二人は本当に面白いな」
「龍御さん。貴女本当に酷いですね」
言い終わるや否や龍御さんを抱え一目散に逃げた

勝ち目の無い闘いは逃げるべし。最初に源さんに教わった基本を忠実に守り振り向く事なく走り去った

「悠さん・・・・明日学校休んでいいですか？」

「駄目ですよ」

笑顔で言わないで

七話目：僕と年上と時々勘違い（後書き）

慎「はいどうぞ」
龍「（モグモグモグ）」
慎「・・・え、請求書？・・・・勘弁してください」
龍「（モグモグ）クイクイ」
慎「なんすかお姉さん、え、お代わり？ちょ幾ら分食う気ですか！」
請求書？００００００円
慎「ほおぁぁぁぁぁ！死か！財布の温もりは永久に無いのか！コリャ一旦逃げるぜ！生きてたらまた会おう！ｂｙ慎！」
パリーン！

八話目　血と涙と後始末（前書き）

慎「おぉぉぉお久しぶりいいいいい！皆の憧れの的まこッちゃんだ！」

渉「覚えてますか！渉です！ほら、天パの」

慎「君なんか俺と同じ匂いがするわ」

渉「君もか！なんだろ、同じ宿命にある感じだ」

慎「だろ！今日はとことん飲むぞ！」

渉「イエッサァァァ！」

慎「取り敢えず本編行ってみよぉぉぉ！」

八話目　血と涙と後始末

どうもこんにちは。遊思です。最近立て続けに色々ありまして現在保健室の緊急治療室に運ばれてる真っ最中です
夜司先生。信じてます。信じてますからホント人体実験だけは勘弁して下さい。ホルマリン漬けは御免です
「んふふ～。君ほどの逸材がこんなになるなんて滅多に無いからね～。安心したまえ私の治療は完璧だから。ただちょっと細胞やら何やらイジくるだけだとも」
「いやあぁぁぁぁぁ！」
無情にも緊急治療室の扉は僕を自由な世界から隔離した

事の発端は皆さんのご想像通り龍御さんが元凶です
ええそうです。暴徒と化した二人から逃げる事一週間、潜伏していた体育館倉庫の跳び箱の中での籠城作戦はクラスメート男子による裏切りと数にモノを言わせた体育館を中心とした包囲網の展開、及び理沙と渉を人質にした政治的圧力により屈しざるえなかった
渉だけなら切り捨てたが罪の無い後輩を見捨てることは出来ませんその後体育館の教壇に引き摺り出された僕に待っていたのは勘違いの制裁と獣ゴミムシ屑等の罵詈雑言でした。
鉄バットと陸上用のスパイク使った奴素直に名乗り出ろ。此方は拳で応えてヤル

それにしても美樹も心も強くなった。前なら精々打撲か浅い切り傷で済んだのに

「肋骨、左腕の骨折に打撲１４ヶ所、右肩から腕に切り傷、右手首脱臼と右アキレス腱の切断。主な怪我はこんな所だね。しかし白銀も凄いもんだ。あの二人相手なんだ本当ならミンチだね」
「ホントですね。それはそうとさっさと治療してください。気持ち悪くて仕方無いです」
「そう言うなよ遊思君。痛みは感じないし今の代価ではこれが限界だよ。素直に研究に付き合ってくれると嬉しいな」
「はぁ。分かりました」
「よろしいよろしい。私の『血の掟』に任せなさい。さあ今度は耐久テストだ」
夜司先生の血の掟は相手の血を代価に治療を施す力である。治療者を液状の球体で包み痛覚を一時的に奪い代価次第では生きてさえいれば如何なる傷も治療可能である
「さあさあ早速力を発揮したまえ遊思君！」
「せんぱぁぁい！助けてくださあぁい！」
理沙。何故君が此処に居るかは無視するが・・・・・
「何故ナース服？」
「先生がコレ着ないと・・・・・」
「着ないと？」
「君のスボンを下げるって行ってみたよ」
最低だなこの医者
「おお遊思君。微弱ながら細胞の耐性上がったね。ふむふむ。やはり私の考えは正しかった。つまり・・・・これが・・・・・こう」
先生はトランスを始めたので後輩にさっさと着替え帰るよう促す
素直に従う後輩は最後にチラッと此方を伺い赤面になりながら走り去っていった。上着着てないから仕方無いか
「ふむ。ふむ。ふむふむふむ。おお私の理論は正しかった。うんうんありがとう遊思君。これでまだここで働けるよ」
「そうですか。そろそろ骨はくっついたんじゃないですか？」

先生は書類から顔を上げ球体に腕を入れ骨折部を指でなぞる
「ふむ。後１５分で完治するな。職員室には連絡を入れておく。自動で解除されるから着替えて教室に戻るといい」
先生は代えの服一式をベットに投げ書類片手に保健室を出る
だが直ぐに顔だけ出して此方を眺める
「時に遊思君、彼女は募集中かい？今なら週休二日で三食付き。薬物投与無しでお買い得だよ？」
「去れ悪魔」
おお恐い恐いとおどけながらマッドサイエンティストは視界から消えた

～～～１５分経過～～～

で、教室に戻ったんですが何でしょうかこの混沌とした空間は
主に美樹と心を発生源として周囲に負のオーラを展開している
美樹は突っ伏し机から溢れるほど何か液状の物質を垂れ流しにしている
心に至っては刃物類一式を差し押さえられ『自害厳禁』と書かれた棚に収納されている。さらに拘束されている。いやそこまでしなきゃ駄目なのか？それと渉がなんで逆さ吊りなんだ
「え～っと・・・ただいま戻りました・・・・」
クラスメート全員の視線が僕を凝視します。まて加藤。何故頬を赤らめる

「ゆうちぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！！」
涙と鼻水まみれで突撃してきた美樹はその小柄な体を文字通り全力でぶつけてきた。無論僕は無事でいられる訳がない
吐血しながら廊下に逆戻り。逃走のお陰でまともに食事すらしてないのが功をそうしたのか吐血だけで済んだ
「ごべぇんなざぁぁいゆうちぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！」
顔を擦り付けながら泣き叫ぶ美樹。もう涙と鼻水でぐっちゃぐっちゃ嫌な音もセットだ
「み、美樹。取り敢えず離れて。めっさ痛いから。メッサ痛いから！」
痛いの一言にビクンと反応した美樹は素早く離れ相変わらずぼろぼろ泣きながら此方を見ている。
体格が小柄なので上目遣いになるのだが意味も無く罪悪感に包まれる。女の涙は無敵だ。イヤマジで勘弁して下さい
「けが・・・・どうなったの？」
「致死量だったよ」
「ぶぅわぁぁぁぁぁあぁぁぁぁん！！ごめんゆうちぁぁぁん！！！」
ぐっちゃぐっちゃぐっちゃぐっちゃぐっちゃ

無理矢理引き離すとびろーんと伸びる粘液。洗うの僕なんだけどな
「いやほら、夜司先生のお陰で一応完治したからさ。それにその場で誤解解かなった僕にも責任はあるし」
「でも・・・・・」
「はいはい捨てられた仔犬みたいな目で見ないの。お互い様って事でいいからさ」
まだ納得いかない美樹の頭を撫でながら視線を右にスライド
何処からともなく現れた御座に正座し、右手には新品のカッターナ

イフを携え確りと己の脇腹に添える大和撫子心ちゃん。律儀に黒天血に背を向け介錯せいと言わんばかりの雰囲気ですすいません今は平成です

「心ちゃん、チミは何をしているんだい？」
「後生だ。介錯を頼む」
「僕の経歴に殺人罪なんていらないから。ほら、人だかり出来てるし片付けて」
「武士の後生を聞いてもらえないのか・・・・」
「平成の世に武士は居ないから。そんなに言うなら後で頼み事するから今は片付け片付け」
渋々と片付け始めた心と未だに人様の背中に顔を押し付けているお子様を交互に見て深々と溜め息を吐き出した

「やあやあ遊思君、具合は良いみたいだね」
「お陰様で。若干まだ貧血気味ですが」
「そう言わないでくれよ。力には常に代価が伴うのだから」
夜司先生はケラケラ笑いながら封筒を手渡してきた。封は特殊加工され宛名は悠さんになっている

「君の細胞の実験結果だよ。中々興味深くて実に不可解な結果が出てきたよ。今まで見たこと無いケースだね」
「・・・・それは良い意味ですか？」
「それは分からないね。何せ君の細胞からはサンプルであった白銀以外の微量な細胞が検出されてね。一応サンプルは全て記憶してる

けどどの細胞とも一致しないんだ。実に不可解だろ？」
僕の中に別の細胞？まるで僕の中で新な生命が誕生してるとでもいうのかな？だけどこの人は研究に対しては嘘は言わない。ならそうなんだろ
「時に遊思君、彼女は募集中かい？今なら週休二日で三食付き、薬物投与無しで更に人体解剖と遺伝子組み替え無しと破格のお買い得具合だよ」
「視界から去れ悪魔。パソコンをパンクされてもいいのか」
「あーそれは痛いねうんご免なさい」
ほんとなんでこんな人が八又五頭主に入ってるんだろうな

八話目　血と涙と後始末（後書き）

慎「いやなぁ。妹は可愛いぞ。うん。何処に見せても恥じないぞ俺は」

渉「俺も小百合さんだけは誰にも負けないって思うね」

慎「でも最近妹の過剰接待に何故か貞操の危機を感じるのは何でだろう」

渉「最近小百合さんのパンチに一筋の快感を感じるのはなんでだろう」

慎「・・・・・・」

渉「・・・・・・」

慎「飲むぞ！」

渉「はい！」

急性アル中がなんだい！生きてたらまた会おうｂｙ慎

九話目⇔ラブラブランデブー（前書き）

慎「いよっしゃぁぁぁ！皆オヒサ！慎だぜぇ！」
天津「はじめまして。天津アキラです」
慎「誰！この人誰！スタッフ、迷子かなんか？」
天「失礼な。ちゃんと出てますよ」
慎「何処に？」
天「九話目の最後に」
慎「今からじゃねーか」
天「それじゃぁ本編すたぁーと」
慎「仕事取んなゴラ！」

九話目⇔ラブラブランデブー

夢実心は乙女である

休日袴姿で早朝素振り５００回。その後、夢実家代々の型『烈翔の構え』からの素振り５００回
シャワーを浴びて一時間の瞑想の後漸く朝食。健康第一思考のバランスの良い朝御飯をしっかり噛んで済ませる
そして食後の茶を飲み一息ついて今日は何をしようか・・・・
そんな風に休日の一日が始まる夢実心はれっきとした乙女である

乙女である

そんな夢実心は脱衣所で乙女史上最大の危機に直面していた
「落ち着け・・・・落ち着くんだ私・・・・・・・・にへぇ」
近所の年下から同年代の女子に絶大な人気（R指定も含む）を誇る心は想い人である遊思にすら見せた事の無い緩みきった幸せ絶頂の表情を晒していた
全裸で

脱衣所なのだから当たり前と言えば当たり前なのだが・・・・・・
「・・・・・・遊思とデート・・・・・にへぇ」

間違いなく今の夢実心は変態であろう

手早くシャワーを浴びて部屋に戻った心は勢いよくタンスを開け放った
今日は真剣勝負。一瞬の隙もミスも許されない。何故なら初デート
そこまで気合いが必要かと思う方、部活に学校生活を捧げてる人、
若しくは一人で居るのが好きな人が急に好きな異性と初デート。な
んて事になった場合確実にこうなる。そして確実に自爆して苦い思
い出が残るものである。あなたの近くに一人は居たでしょう
「下着・・・・これがいいのか？いや、もしかしたらこっちか」
綺麗に並べられた下着を正座で一着一着慎重に吟味する彼女はやは
り全裸

彼女の為にも一言弁明しよう。彼女は決して痴女では無い
「ここはやはりいつも通り白で・・・いや、ここはあえて意外性を
見せるために赤か・・・・・」
着てみては鏡の前で馴れないせくしーぽーず
クラスの男子が固まって読んでいた週刊誌をチラッと見た時の姿を
真似てみたが大変ぎこちない
想像を助けるために例を出すと、貴方の理想の姉御、若しくはお姉
様の高校生時代を想像し、馴れない初デートで鏡の前を行ったり来
たり、たまにポーズをしてみる。といった感じである。無論家を出
るのは約束の２時間前

さあ漸く服装が決ったようです。大きく深呼吸して時計を確認
やはり２時間前
今日は遊思君との確約があるので美樹ちゃんはご遠慮して頂いたみ
たいです。居間で正座してひたすら時間を待ちます
待ちます

待てません

いざ出陣と立ち上がるとタイミング悪くお母さんの璃小さんが眠たげな目を擦りながらやって来た

「ああ・・・・おわようココちゃん」

「母か。今から出掛けてくる。夜食は済ませて来るから父と食べてくれ」

さっきまでのにへぇ顔を微塵も感じさせない身の代わり様はある意味匠の域に達しようとしていた

「そなの・・・・いってらっしゃ～い」

「ああ。行ってくる」

「お母さんが買った新しい下着つけた？」

「ななな何を言ってるか母！アレを身に付けろと言うのか！」

「えええ～。男ならいちげきひっさつなのにい」

「無理に決まっているだろうが！紐は駄目だ！」

近くにあった箱ティッシュで母親の頭を殴り逃げる様に家を飛び出した心ちゃん。中では『反抗期だぁぁ！ケンさぁぁぁぁん』と泣き付く母親の声が響いた

早朝６時、ご近所さんが起きるにはちょっと早すぎる一日の始まりである

さてさて少し時間を遡ってみよう。とある一軒家。古風で中々広い敷地のあるお宅の様で、厨房からはリズミカルな音が聞こえます。覗いてみましょう

包丁片手にお鍋を見るのは校内随一のモテ野郎こと遊思君です。周りから殺意や呪詛をぶつけられても文句の欠片も言えない立場です

遊思君は意外に万能です。料理も出来ますしお部屋の掃除、洗濯、

ご近所付き合いもそつなくこなす彼は、お昼のお弁当作りに余念がありません
本当なら心ちゃんが『わ、私がお昼をつつ作ろう』等と裏返った声で話していたのですが心ちゃんは下着選びに全力を注いでいるので完全に忘れています。知ってか知らずか遊思君はせっせとお弁当箱に詰めています
「ふぅ。心の事だから舞い上がって忘れてるだろうしな」
大変気が利きますね。男性の皆さん。ここはテストに出ます。要メモです

さてさてお弁当も完成し、時間を確認。
余裕です。余裕過ぎて軽く二度寝が可能な程余裕です。ですが遊思君、さっさと鞄にお弁当をしまうとイソイソと玄関に向かいます。
遊思君の中では心ちゃん2時間前出発は予測の範囲の様です
「あら、遊思さんお出掛けですか？」
音もなく現れたのは悠さんです。相変わらず普段着で着物姿なのですが一切違和感を感じさせない貫禄があります。伊達に数百年生きてませんね
「お早いお出掛けですね。お帰りはいつ頃になりますか？」
「夜は済ませてきますんで源さんと食べてください。冷蔵庫に入れてますからチンしてください。悠さんは朱の皿ですよ」
「分かっていますよ。それでは気を付けて行ってらっしゃい」
「行ってきます」
午前5時。ご近所さんが起きるにはかなり早すぎるそんな一日の始まりである。我々も同行してみましょう

さて、デートの待ち合わせには早すぎるのではなかろうか。と疑問に思うような午前６：３０

心ちゃんは周囲に人が居ないことに安堵しながら待ち合わせ場所へと向かっています。誰かに見られたら・・・・・等と考えたら自然と足が早くなり、何故か電信柱の影や建物の影に身を隠しながら進んでいきます。大丈夫。ひとっこ一人見当たりませんし例え誰かが貴女を見てたとしても決して声は掛けないし貴女が夢実心だと気付く人は皆無です。保証します
さて、ちょっと先に見えるのは、待ち合わせ等によく使われている噴水のある公園。カップル達の待ち合わせには打ってつけです
木から木へ俊敏に移動する心ちゃんはふと立ち止まりました
待ち合わせよりかなり前に来た筈が既に先客がいらした様です。言わずと知れた遊思君です。心ちゃんは慌てて隠れると身なりを整え始めました

さあ皆で指差し呼称です
「体調良し。思考良し。服装良し。全部良し」
オールグリーンみたいです。深呼吸してさりげなく、今来ました風を装って向かいます。しつこい様ですがお爺ちゃんがヨレヨレとランニングを始めるような早朝です
「ゆゆゆ、ゆうし！おひゃっ、おはよう！」
裏返った上に噛みました。もうグダグダです
「あ、おはよう・・・・・・え？心？」
「それ意外に何がある！私は私だぞ」
「いや・・・・その・・・・・・え？」
敢えて私も触れませんでしたが彼女の服装にご注目。下から順に
心ちゃんにしては可愛らしい靴。〇です
スラリとした美脚線が際立つGパン。何も問題ありません
夏間近の癖にやたら厚いパーカー。おや？
やたらでかいサングラス。徐々にベクトルが変な方に曲がってます
麦わら帽子。アウトです
「ごめん。そんな服装だと一緒に歩くのはちょっと・・・・ね」

私も激しく同意です
それなりに衝撃を受けたらしく、変なポーズで固まる心ちゃん。その隙に麦わら帽子とサングラスを回収。バックに隠しパーカーは腰に巻いておきましょう。ええ、大分良くなりました
「あの、そのな・・・・焦っていてついだな」
「いいよ。僕も心の新しい一面見れて嬉しいから。可愛い所あるじゃん」
キラースマイル炸裂です。ボフンなんて音がしそうな程真っ赤になった心ちゃんは取り敢えず手短にある石で殴りかかります。一歩間違えば血の噴水の出来上がりです
「うわぁ！いきなり何するんだよ！」
「かかか可愛いとか急に言うな！びっくりするだろうが！」
華の女子高生はびっくりしたら撲殺を企てるそうです。男子の皆さん要注意ですよ
「はぁ、はぁ、はぁ、遊思、すまん・・・その・・・・・な」
「いいよもう馴れたし。ほら何処かで時間潰そ。僕朝御飯まだだからさ」砕けた石を滑らかにスルーしながら二人のデートが幕を開けた

さて、近場のファーストフードでたわいもない会話に華を咲かせる二人。片や大和撫子・流れる黒髪が色気漂う心ちゃん
片や白髪鬼・キラースマイルと優しさの塊遊思君

自然と周りからの注目もさることながら超お似合いカップルの様なオーラを醸し出しています。ええ、彼女いない不良には面白くありませんね
「おぅテメーら。朝からイチャついてんじゃねーよ。胸糞ワリー」

「つか君マジ可愛いね。俺等とどっかいかねー？なあ行こうぜ」
さて、貴方ならこの時なんと叫びますか？私は迷わず『衛生兵！衛生兵！』です
「・・・・失せろ。貴様等を相手にしてる程暇ではない」
心ちゃんは乙女モードから修羅モードに移行です。ＢＯＮＵＳ濃厚演出ですね
「あん？何ちょーしこいてんだコラ。女だからって容赦しねーぞ」
「・・・・ふっ！」
彼女にかかればメニュー表程度の薄さがあれば刃物と大差はありません。不良の着ていた服は細切れです。ＢＯＮＵＳ確定です
「もう一度言う。今すぐ失せろ」
既に不良達の姿は御座いません。メニュー表で空を一閃。クルクルと器用に回して所定の位置にストン。何処か手慣れた様に見えます
「はぁ、すまないな遊思。たまにああゆう輩に絡まれる時があってな」
「いいよ。心が行かなくても僕が出てたから」
彼の一定条件下での全身凶器は周知の事です。だからといってテーブルの裏面を引っ掻いてはいけません
「それじゃそろそろ行こうか。今から駅に向かえば丁度いいから」
「そうだな」
お二人は肩を並べて駅に向かいます。それでは我々は先回りと行きましょう。ワープです

「さ、まずはどれから乗る？ジェットコースター？」
「ゆ、遊思に任せる」

心ちゃんはあっちにフラフラこっちにフラフラ目線が泳いでます
時折メリーゴーランドで止まるのは黙認しましょう。触れてはいけませんん

某有名遊園地。アトラクションもいっぱい。マスコットキャラは敷地内の端と端辺りになると同時刻に二体は確認出来るでしょう。暇と人員がある場合お試し下さい
「さ、僕達の番だよ」
「よ、よし！かかってこい！細切れにしてやる！」
「ちょっ！心！どっからそのパイプ持ってきたの！」
警備さんに頭を下げながらパイプを返納
イソイソと乗り込みます。然り気無く、そう然り気無く右隣の遊思君の手に自分の手を重ねようと手をソワソワさせています。しかし無情にもガコンという機械音と共にジェットコースターは発進。機を逃した心ちゃんは渋々ベルトに手を掛けます。さあ、頂上は目前
「時に心。絶叫系って大丈夫なの？」
「・・・・・」
残念。顔面蒼白です
ああ悲しきかな。もう斜めに傾いてます。合掌
「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ…………」

目尻に涙を浮かべ遊思君に支えられながら近くのベンチへと向かいます。心ちゃんは絶叫系は心底ダメなようです
「すまぬ・・・遊思」
「いや僕も御免ね。しっかり聞いてなくて」
しかし心ちゃんはジェットコースター乗り場からベンチまでの距離を遊思君と密着してこれたので心臓バクバクの狂喜乱舞しています。
タダでは起きませんね
「飲み物買ってくるけど何がいい？」

「すまぬな。炭酸以外なら何でもいいぞ」
「分かった。ちょっとまってて」
遊思君の後ろ姿を眺めながら先程の温もりを確かめる心ちゃん。好きな人とならもう一回位乗ってもいいかな等と考えながらイソイソとパンフレットを見ます
デート一週間前から綿密に計画されたマル秘パンフ。赤字でどの乗り物に乗るか書かれています。
ほぼ全て乗り物が隣の遊思君とある程度密着できるものばかりです。無論メリーゴーランドは外れてません
「お待たせ。オレンジとどメロンっちが良い？」
「オレンジでいいぞ」
二人でベンチに座り一息。目の前では調子に乗ったアヒルが女子高生の肩に手を回して記念写真。手慣れています
「どうする、ちょっと早いけどお昼にしようか？」
「お昼・・・はっ！す、すまぬ遊思、昼食のことなんだが・・・」
「はは。作ってきたよ。心の事だから舞い上がって忘れてると思ってさ」
「うう。すまぬ。下着選びに時間を掛けすぎて」
「え？下着？」
「ゆゆゆゆ遊思！忘れろ今の戯れ言は忘れろ！」
「え？ああ分かったけど・・・・・紐？」
「バカモノ！そんな破廉恥なもの身に付けるか！黒だ！」
墓穴を掘った心ちゃん
「あぁはいはい忘れるから忘れるから泣きそうにならないの」
「ち、違うぞ。違うぞ」
入学当初から築き上げてきた大和撫子・サムライガールとしての人格が音を立てて崩れ去りました
ちょっとした原っぱに、可愛らしいシートと手の込んだお弁当。タ

コさんウインナーとリンゴのウサギさんは当たり前。味も悠さんのお墨付きです
「さ、どうぞ召し上がれ。舌に合うといいけど」
「うむ。い、頂きます」
手始めにタコさん。細かな細工が施され食べるのも勿体無いのですが舞い上がってる心ちゃんは躊躇なく食べます。思わずにへぇ顔になりそうでしたがそこは心ちゃん最後の要が抑えます
遊思君はにこやかに微笑みながらお握りを頬張ります。具は鮭ですね
和やかな雰囲気です。空は快晴。風は心地よい。周囲には人影も無く正にラブフィールド全開です

ＡＴフィールドと同強度ですので注意しましょう

「あれ？ここ何処ですか？姉さーん」
心ちゃん固まりました。聞き覚えありますね？ええそうです。佐々木先生より迷子率が高い子は一人しかいません
「あれ？もしかして先輩？やっぱり先輩だ！」
ぱたぱた駆け付けて来たのはご存知泣き虫後輩の桐下理沙ちゃんです
心ちゃんは面白くありません。二人っきりのスウィートタイムを邪魔されているのです
「ひぃ！夢実先輩！こ、怖いです」
遊思君の背中に回り込み怯える理沙ちゃん。心ちゃんの殺気は周囲でうねりを上げます
遊思君も馬鹿ではありません。原因が分かっている以上対策は一つ
「理沙、あの時計塔を目指してひたすら直進すれば迷子センターの看板があるから」
「先輩・・・・その」
何が言いたいのか遊思君は既に察しています
「ゴメンね。今は心とデート？中だからそれは出来ないよ」

デートという言葉に幾分ショックを受けた様ですが美樹ちゃんより精神年齢がやや高い理沙ちゃんは素直に従います
「夢見先輩、お邪魔してすいませんでした！」
言い終わると同時に全速力で走り去った理沙ちゃん。遊思君の表情から理沙ちゃんに対する謝罪の念が見て取れます
「遊思、何故デートの後に疑問系が付いたんだ」
「いや、これデートなのかな？ってふと疑問に思って」
「それは勿論で、デートだとも」
デートの単語に赤面する心ちゃん。中学生か君は

その後邪魔する者も現れず、片方は恋人気分で有頂天になりながらアトラクションを乗り継いで行きます。絶叫系だって隣の遊思君パワーでへっちゃらです
「ゆ、遊思、これは流石にダメだ。許してくれ」
高さ４０ｍ近くある鉄の棒が二本。そして中央に固定された椅子に伸びるゴム。逆バンジーです
再び顔面蒼白の心ちゃん。いかんせん椅子には一人しか座れません
「た、頼む、後生だ」
「これ前回僕を惨殺しかけた罰ね。それじゃ係員さんお願いします」
「ゆ、遊思！すまぬ！アレは私が悪かった。誠意込めて謝罪するからゆるいやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ…………」
合掌

楽しい時間とはあっという間です。空は徐々に朱色に染まり始めま

した。この世の終わりみたいな顔で泣きながら解放された心ちゃんを言葉巧みに宥めながら最後の乗り物、観覧車へと向かいます

遊思君が鬼畜ではないかと思う方、是非御一報下さい。さて、一周２０分のこの観覧車。バカップルなら確実に乗る事で定評で、夕日をバックにした景色を非常に鮮明に見ることが出来ます

「ゴメンゴメン。少しやりすぎたよ」

「・・・・・許さん」

右頬がぷっくり腫れた遊思君。彼女の渾身の一撃の威力を物語っています

取り敢えず遊思君は心ちゃんの頭をなでなで。心ちゃんはそっぽ向いたままされるがままです

続いて頭の上の手を頬をなぞるように下げる遊思君。ややエロスです。心ちゃんはピクッと反応するも理性総動員でそっぽ向きます

目の前でこんな事をされたら殺意すら生温い感情が沸き立つ事必至です

「ココちゃんごめん」

「ししっし知らん！」

理性軍劣性です。すると遊思君わざとらしい溜め息をはいて心ちゃんと正反対の方を向きます

「あーあ。心に嫌われちゃった。あーあ」

わざとらしいです。殺意が芽生えそうです

しかし心ちゃんは気が気ではありません。焦ってます。滅茶苦茶焦ってます。焦り過ぎて何を喋っていいか分からず口をパクパクさせています

「あ・・・・いや・・・・・・・そのだ・・・・・・・その」

「嫌い？」

「そんな訳無いだろ！」

言った途端遊思君はにっこり笑い、心ちゃんは完熟トマトに早変わ

り。直ぐ様言い訳を考えた様子ですが結局恥ずかしそうに俯いてしまいました
遊思君は笑ったまま再び心ちゃんの頭に手を乗せます
「冗談だよ。僕は心を嫌いになんてならないよ」
「・・・・・本当か？」
「勿論」
漸く恥ずかしがりながら微笑む心ちゃん。観覧車は頂上に差し掛かっていました

さて、観覧車を降りた二人は近くのレストランでディナーを満喫し、帰路に着きます。すっかりご満悦の心ちゃんは然り気無く遊思君と手を繋いでいたりします
心ちゃんの頭の中でミッションコンプリートのファンファーレが鳴り響く中、とうとう夢実家に到着。デートの終りが迫っています
「ゆ、遊思。今日は色々と楽しかった。ありがとう」
「こちらこそ。可愛い心が見れて良かったよ」
「か、可愛いとか言うな！恥ずかしい」
家の前で笑う二人。とても良い雰囲気です。心ちゃんの頭の中では淡い期待が渦巻いています
こんな雰囲気で最後に求めるのはやはりアレなのでしょう
「ゆ、遊思・・・・・・そ、そのだな・・・・お・・お願いが・・・・・あるのだが」
途切れ途切れつっかえながら赤面で話す心ちゃん
遊思君は笑顔のまま首を傾げます
「その・・・・き・・・・キ・・・キ・・・！」

身体は大人、ハートは中学生以下の心ちゃん、キの次が言えません。
さ行の三番目なのに言えません。今時の小学生高学年でも言えるのではないだろうか
「・・・・っ！・・・・すまん。なんでもない」
心ちゃん本気で落胆して泣く泣く諦めました。もっと大人になってから出直しですね
遊思君は何が言いたかったのか分かってる様に微笑み心ちゃんに近付きます。近いです。後数ｃｍでちゅうです
「自分の口からキスって言えるまでお預けだね」
おでことおでこがこっつんこ。遊思君は息のかかる程超近距離で微笑み離れます
「それじゃ心。今日は楽しかったよ」
手を振って帰路に着いた遊思君。心ちゃんはぽけーと佇んでいました。一時間近く

その後戸締まりに来た心ちゃんのお父さん、ケンさんに無事発見され漸く自宅へと辿り着いた

その後三日間生死の境をさ迷うような知恵熱を出した心ちゃん。
うわ言の様に『おでこ・・・おでこ』と呟き時折にへぇっと笑っていたと、後日証言台に立たされた専業主夫賢実は証言している。そして被告人として起訴された遊思君は自分は無実であると容疑を否認。やり過ぎた面も無いとは言えないが心を少しでも大人にしようという配慮であり、決して下心は無いと証言している
しかし原告側の夢見璃小は心の心情をある程度把握していたにも関わらず、行き過ぎた行為は故意であり、責任を取るべきと主張している
裁判官は夢実心、世羅美樹及び桐下理沙等複数の女生徒との関係を

持ちやがってコンチキショウ地獄に墜ちろ等の内面を隠し満場一致で有罪を判決

『美樹百連撃の刑』を言い渡した。後日刑の執行。佐我遊思（17）は保健室緊急治療室に搬送。未だ生死の境をさ迷っている

記録［二学年裁判員書記長、夢実心近衛兵団長天津アキラ］
※内容は、佐我遊思の証言及び桐下理沙、夢実夫妻、不良二名。某遊園地係員、売店の店員、敷地内での独り身の男性十数名の証言により忠実に再現されたものである

九話目⇔ラブラブランデブー（後書き）

慎「最後にって本当に最後だったな」
天「頭にくるよ本当。次出してくれるんでしょうね？」
慎「いや、俺に言われても。作者に交渉して」
天「あー本当ムカつく。爆発するぞ」
慎「え？爆発？ちょっ！なんかスタジオ震えてない？なんかアキラさん光出したんだけど！ローレス！ここで卍〇とかすんの！やめっ！やめれ！」
天「さーん！にー！」
慎「マジ生きてたら会おうな！ｂｙまことぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！」

十話目＝実写版血の池プール（前）（前書き）

慎「１２０日ぶり！作者くたばれ！」
作「ゴメン！マジゴメン！許したって！」
慎「なんでこんな遅いんだよ！」
作「朝７時から夜の１０時まで働いてて精も根も尽き欠けてて」
慎「それでも遅いぞ。しっかり書こうよな」
作「面目ない。懺悔」
慎「まぁ取り敢えず本編いってみよ」

十話目〒実写版血の池プール（前）

「はいやぁぁ！」
水分を一切吸収しない謎の天パを備えた渉が逆立ち状態で水上を滑走する異様な光景を眺めつつ、太陽の光を直に浴びて大きく伸びをする。今日から僕達の学校はプール開きです
「ゆうちゃーん。泳ぎ方教えてー♪」
「赤子！お前は泳げるだろうが！」
脱衣場から聞こえる二人の声。その内声のボリュームは大きくなり、気付いたらプールを挟みお互い必殺の構えをとっていた。何故でしょう。水面から異常な波紋が拡がっています
「今日こそその無駄な脂肪ごと海の底に沈めてやる！」
「何もない貴様ごときに何が出来る！海の藻屑になるがいい！」
何故か二人の前に広がる消毒液まみれのプールが大海に見えるようです
『覚悟！』
空中で交差することなくモロに激突した二人はそのままプールに落ち漂流物と化した
引っ掻き棒で二人を回収して何事も無く授業が始まった

「今日はプール開きだから一日自由に遊んでいいぞ」
『いやったぁぁぁぁ！』
割と面倒臭がりで有名な体育教師はさっさと日陰で競馬新聞なんぞ広げてる訳ですが・・・・あーそこの二人、飛び込まないで。それから山下、警察呼ぶぞ。それと加藤！プールのなかでモジモジするな！さっさとトイレ行け！
「ゆうちゃーん。遊ぼーよー暇だよー」
「美樹ちょっとまってくっつき過ぎだって！」

ただですら貴女の格好はロリコン野郎が確実に昇天しそうなスク水姿。そんな格好でくっつかれてはたまったものではない
「欲情する？チラリ」
「胸元広げなくていいから！僕だって我慢の限界あるんだよ！」
「そうだぞ赤子。無い胸見せても迷惑なだけだぞ」
いやいや心ちゃん。貴女の胸に書かれてる名前はなんですか？ひらがなで『こころ』はないでしょ
「いや・・・これはだな、母がこの方がイチコロだと言ってな・・・・」
「心、それは小学生までだから。お願いだからすぐ直そうね」
「ゆ、遊思がそう言うなら・・・・」
何故そこまで落胆するの？君は高校生だよ？

よく分からない二人の心境は取り敢えず無視して早速水の中へと向かいます
「ゆ、ゆうちゃん助けて！足着かない！」
何故か一緒に深い方から入った美樹はマジで溺れそうになっており、迂濶に力を解放したせいかばた足だけでエライ事になっている。押し寄せる荒波に流されるクラスメートを横目に手刀で荒波を葬り去る心の背後に退避。隙を見て美樹を捕まえた
「いやん。ゆうちゃんそんな所触って・・・・いいよ？」
「何が？」
潤んだ瞳で見上げてくる美樹を素晴らしい位の冷たい目で見下ろし浅い方に引っ張っていきます
漸く足のつく深さまで来て美樹を離します
なに美樹・・・駄々こねないの。は？あの日の夜？僕の肋骨折った日の事でも言ってるの？
「赤子。さっさと遊思から離れろ。動きづらそうだろうが」
「いーだ。刀が恋人な人に言われたくないよーだ」
一触即発な雰囲気に、周りは我先にとプールサイドに逃げ、爆心地

ギリギリの僕はゆっくり後退しつつ退路の確保を試みます
『何処へ行く』
無理です。両肩を掴まれた僕は地獄の門をノックしています
『勝負だ！』
景品は僕ですか？・・・・・僕ですか

「第４回、遊思争奪杯ｉｎプール。皆さんこんにちは。司会担当の三浦渉です。今回は解説に佐我遊思君をお迎えしてお送り致します」
「何このノリ？つかそのカメラとか何処から引っ張り出した」
「この番組は、校内の絶大なる支持によりお送りしております」
「つまり映像欲しさに群がった連中が黒幕か」
「さて今回の対戦種目はこちら『水上騎馬戦』です」
「水上騎馬？山下先生の紙幣傀儡でも使うのか？」
「山下先生は『二人の水着姿が見れるならお金に糸目はつけない』との事で快く快諾していただきました」
「妻子持ちの言葉とは思えないな」
「あ、紙幣傀儡についてあのカメラに解説お願いします」
「誰に向けてだよったく。紙幣傀儡は紙幣、つまり札の金を人形の傀儡にする力で金額により時間やパラメーターが変化します。ちなみに山下先生幾ら分使う気だ？」
「ボーナス全て使う気です。来月結婚記念日だって呟いてた気が」
「離婚の危機になっても僕は無関係だからな」
「俺も以下同文。あーアナウンサー口調疲れた」
「なら辞めろよ。この企画そのもの破棄してよ」
「あー無理。ギャラリー総出で敵に回るぞ」
割れんばかりの歓声と怒号。プールサイドは生徒教師で埋め尽くされ外では大型スクリーンで生放送までしている。帰って授業しろよ
片や山田茂樹率いる美樹ファンクラブを筆頭にロリ万歳のプラカードを掲げる犯罪予備軍

片や天津アキラ率いる夢見近衛兵筆頭にお姉様ＬＯＶＥのプラカードを掲げた変態集団
誰一人１１０番などする気は無く、今か今かと待ちわびてます。帰っていいですか？
「えー今回の商品でもある遊思君。一言頂けますか？」
「皆しねばいいのに」
「ありがとうございます。それでは両者入場です」

即席の入場門から現れた二人と後ろを歩くミイラの様な出で立ちの紙幣傀儡達。両者の先頭を歩く傀儡は大きな旗を掲げ、『巨乳滅殺』『幼児滅却』の文字が力強く書かれている
「こちらの旗は和平派の書道部の方にお願いしました」
「書道部の人すみませんでした」
またもやプールサイドで対峙する両者は独特の覇気で波紋を拡げる中、紙幣傀儡は無言で水中に整列し騎馬を組み立て始めた
「赤子、今日こそ決着をつけようか」
「ふん、二度とゆうちゃんには近づかせない」
それにしても何故二人の水着は学校指定からビキニに変わったのでしょうか。美樹には余りにも酷な仕打ちにしか見えない

「それではこれより第４回佐我遊思争奪杯、ポロリもあるよｉｎプールを開催致します」
「ちょっ、タイトル変わってるし。不味いだろ教師の前で」
率先して良席を確保し盛り上がる男性教師陣を視界に入れてしまい、この学園の存在意義を考えてしまった。取り敢えず校長は絞め落とすか
「それではルール説明です。遊思さんよろしくお願いします」

「はいはい・・・はぁ。勝負の内容はお互い頭、肩、腹部に付いた風船を割ってもらいます。先に全て割った方の勝ちです。三回勝負で先に二勝した方の勝ち。使用武器は各自の自由とし、何をやっても構いません。本来なら客席に被害があった場合ペナルティーで風船一個割ることになりますが僕の独断で許します。存分にやるように」
「周りからブーイングの嵐が吹き荒れてますね」
知るかそんなこと

「それでは１０分後開始致します。ギャラリーの皆様、ヘルメットと防弾チョッキのお求めは購買部をご利用下さい」
「なんでも揃う購買部ってキャッチフレーズは伊達じゃないな。僕も買いに行こ」
こうして戦争が始まった

傀儡の上で火花を散らす両者。美樹のチョイスした武器は某ＲＰＧの上位武器や白い悪魔の異名を誇るＭＳのアレを彷彿させる棘つき鉄球。心は愛刀の黒天血の他に布に包まれた細身の武器を携えています。恐らくこれも刃物でしょう
「解説の遊思君、あの武器のチョイスはどうでしょうか？」
「相手を殺す気です。風船なんて割る気はない筈です。それとこの国の法は厳守すべきです」
「ありがとございます。それではいよいよ死合開始です」

「ツッコミません」
ゴングの音が高らかに響き渡った

先制を仕掛けたのは美樹だ。小学生と大差ない体格で大人の頭より二回り程大きい鉄球を振り回し心を見据える。しかし心は未だ抜刀せずに傀儡の上で美樹の視線を受けている
「この図は・・・遊思君、遠距離のない夢見選手は不利に見えますが」
「心は刀の他にも弓や暗器にも精通してる。あえて近距離の刀を選んだのなら勝算があるからでしょう」
それにあの布に包まれた武器。アレは恐らく龍御さんの夜傘。僕の予想が正しければこの勝負は呆気なく終わるだろう

「ふん、抜かないの？」
「・・・・・抜く程その武器は驚異ではないからな。己の身を按じた方がいいぞ赤子」
「うっさいなぁぁ！」
勢いよく回転する鉄球を心目掛け放つ美樹。僅か数mの距離を一気に積める鉄球を心はギリギリで避け、鞘を走らせた黒天血の居合いで一瞬で鎖を断ち切る
鎖から解き放たれた鉄球は男性教師陣に目掛け突っ込んだ。ざまぁみろ

「赤子、降参するなら今の内だぞ」
「誰がするもんか！まだまだ行けるもんね！」
「ふぅ。ならば此方も手は抜かぬぞ」
黒天血を鞘に納め布に包まれた武器、夜傘が姿を現した
見た目は長ドスの様に鍔は無くただシンプルに造られた刀だが夜傘は刀そのものに力を持つ奇刀

心の黒天血や夜傘。龍御さんの龍崩は普通の武器ではない
タケミカヅチと呼ばれる一族は使用者の代価を元に武具を造り上げる『剣工』をもつ一族。髪や爪。腕や眼まで差し出す者もいたそうだが差し出す代価が大きいほど刀は奇刀へと変わるらしい
その中で一人、力を持つ己全てを差し出した人間がいた。己の血肉総てを使い最高の刀を造り上げて欲しいと言い残しその場で自害した武人。タケミカヅチの人達は三日三晩寝ずに打ち完成した刀がこの夜傘である。この世でも数少ない妖刀に数えられる一振りだ
「世羅、これで終わりにしてやろう」
「！！」
美樹に向け空を斬るように一振りすると小さな火花と共に一瞬で風船が割れた
「加減はしてやった。まだ続けるか？」
鞘に納めた夜傘を携え美樹に背を向ける。これ以上続けても無駄だ。
美樹もその事は分かっているのか悔しそうに俯き肩を震わせている
僕はマイクを取り１５分の休憩を宣言した

「心、龍御さんから貰ったのか？」
「ああ。お前なら扱えるだろうと言ってな。もっともまだ師匠程の爆発は出せんがな」
夜傘のもつ力は『爆炎』。もっとも龍御さんクラスにならなければ爆炎とは呼べる威力は出せない

「師匠と久方ぶりに手合わせして言われてな。剣技は全て教えた。後は己を磨けとな。これは餞別で頂いた」
「そうか。それで、まだ続ける気か？」
「赤子がまだ来るのならばな。何度でも受けてたつまでだ。ゆ、遊思を渡すわけにはいかないからな」

最後までクールに決めれなかった心は真っ赤になってそっぽを向いた苦笑いで返した僕は美樹の元へと向かった

真っ白に燃え尽きた美樹は椅子の上で頭垂れている。声を掛けることすら躊躇してしまいそうだ
「・・・ゆうちゃん。勝てないよ・・・・心に勝てないよ」
「・・・夜傘のせい？」
「違う・・・・心が強くなったから。今なら分かるけど授業前にやった時は手加減してた」
美樹は美樹なりに気付いていたらしい。こうなっては僕からは何も言えない。まだ続けるか。もしくは諦めるか
「ゆうちゃんは・・・・ゆうちゃんは心のモノになっちゃうの？」
「待って、根本的な部分で悪いけど僕に人権が有る限り誰の所有物とかなれないから」
「ホント！」
何故この子はここまで無知に育ってしまったのだろう。僕の教育が間違ってたのか。もっと人として大切な事を学ばせるべきだったのか？僕は甘やかし過ぎたのか？
教育のなんたるかについて混迷する僕を他所に一人暴走を始めようとする美樹は意気揚々と会場に向けて歩み始めた

「さぁ始まりました第二回戦。先程夢見サポーター陣から世羅美樹棄権説が流されましたがどうやら杞憂で終わりそうです。さて、世羅選手はどう攻略するのでしょうか」

「ほぅ。逃げずに来たか。赤子、自棄になったか？」
「ふん。ゆうちゃんは誰にも渡さないもん」
素手の美樹は何故か僕の方を見てきます
「私の次の武器はゆうちゃんだよ！」
「はいぃ？ちょ、何言ってるの美樹？」
「赤子！ゆ、遊思は武器ではなく人だぞ！認められるか！」

「えー只今審判員と特別審査員が協議しております」
中立派の教師と特別審査員として何故か校長が審議を始めている。
途中声を荒げた中立派教師を紙で吹き飛ばしＧＯサインがおりた。
誰かあのハゲを血祭りにしろ

「えー静粛に。審議の結果、佐我遊思君の武器化は認められました」
両者からのブーイングに包まれ美樹の隣に立たされる
「ゆうちゃん。もう離さないから」
熱い視線と共に何故かお姫さま抱っこを所望する美樹は然り気無く
僕の小指を外に捻ります
なす術なく美樹をお姫さま抱っこして心に視線を向けると暴走して
夜傘を乱舞していた
飛び散る火花でパニックを起こす観客を他所に第二ラウンドの鐘が
鳴った

前振りはそこそこに第二ラウンドは呆気なく終わってしまった。錯乱気味の心に普通に接近して普通に割る。背に手足を絡めてるので風船が微妙に割りづらい位置にあるため心には少々不利だったようだ

「心！雌雄を決する時が来たのよ！ゆうちゃんは私のモノだから！」

「卑怯な手を使うとはな！やはり赤子に正々堂々たる志が分からぬな！」

背景にサポーター自作の龍と虎が描かれまさに最終決戦を彷彿させる演出。吹奏楽部の皆様の演奏とそれに合わせるかの様に靡く旗書いてる字がまともならカッコイイのに

「さぁいよいよ最終決戦ですが遊思君、どうなると思いますか？」

「警察は来なくても自警団か生徒執行部が来るのは確実ですね」

「さぁ解説の遊思君が言うのですから恐らく色んな意味では最終決戦ですね」

解説席には防弾ガラス。僕と渉はヘルメットと防弾チョッキを装備した

「それでは世羅選手、武器をどうぞ。遊思君はもう選べません」

不敵に笑う美樹は高らかに宣言した

「みんなー！私に力を貸してー！おねがーい！」

ロリボイスに奮起する犯罪予備軍。今この集団は犯罪集団に昇格しようとしていた

「ふん。ならば此方も迎え撃つまでだ。皆、私に続け！」

変態集団は心の声に歓喜の雄叫びをあげ立ち上がった。何故この集団に警察は動き出さない。手遅れになる前に補導するべきだ。手始めに校長を極刑にするのが妥当だろう

軽く現実逃避してる僕を他所に最終決戦の火蓋が切って落とされた

謝辞※実況が間に合わないため音声のみお伝えします

「幼女万歳！」
「いてこましたるー」
「男なんて信じるもんかー！」
「いたっ！誰の海パンだこれ！」
「きゃぁっ！うぇーんべとべとー」
「幼女万歳！」
「ごー」
「貴様には何故幼子のよさが分からんのだ！失望したぞ！」
「お前こそ！心様に踏まれたいとは思わんのか！変態め！」
「せ、せんぱーい」
「御姉様！」
「よーん」
「あひゃひゃひゃひゃ！お、俺！俺！あひゃひゃひゃひゃ！」
「キエェェェェ！サムライスピリッツァァァァァ！」
「幼女万歳！」
「幼女万歳！」
「さーん」
「静かにしろ！我々は生徒会長直属の執行部だ。今すぐ乱闘をや」
「姉御！俺に力を！」
「たばりらたばりら！」
「うわっ！誰だこの海パン被った変態は！」
「リーダー！明らかにした履いてない男がタオル巻いてこっち来てますよ！」
「にー」

「幼女万歳！」
「御姉様！」
「幼女万歳！」
「御姉様！」
「ぜ、全員確保しろ！」
「いーち」
「なぁ遊思」
「何渉」
「さっきからやたら凶器類お前にぶつかってるけど大丈夫か？」
「なんか後ろに理沙いるから白銀のおかげで無傷。それにしてもなんで水木姿？君体育の授業じゃないよね」
「あっ、こここれは・・・その」
「理沙ちゃんもえええええぇぇぇぇぇ！」
「俺は今から理沙ファンクラブ発足を宣言するぞ！」
「理沙万歳！」
「ドジッ子万歳！」
「後輩万歳！」
「あ・・・理沙に天パ。防弾ガラスの内に入ってろ。銀の洗礼使うから」
「ぜーろ」

吹き飛ぶ変態、折り重なる犯罪者。プールサイドは砕け更衣室は無惨な瓦礫の塊となった
立っているのは運がいい奴と実力者。あと無駄に生命力の強い変態犯罪者コンビ。あと防弾ガラスの後ろにいた連中

「えー大変な事になりましたね。遊思君、状況を見てどう思いますか？」
「何故国は動かないんでしょう。あからさまなテロにしか見えませんよ」
「国よりホデリが強いって事ですかね。それにしても未だに殺り合ってるあの二人は凄まじいですね。闘気か知りませんが後に鬼が見えます」
「右に同じく。しかし美樹もよく心についていくな。実力云々なら心の方が優勢なのに」
死角ギリギリから来る斬激をほぼ直感で避け拳を繰り出す美樹。しかし心は最小限の動きで難なく避け夜傘を振る
瓦礫の山を転がる様に避け起き上がり様に岩を投げるも鞘で難なく打ち払い美樹を見下ろす
「赤子、いや、世羅と呼ぼう。よくここまでついてこれたな。お前の能力でいかに身体能力を引き上げようと経験と反射神経には使えない。それで尚ここまで戦えるお前には才能がある」
「はぁ・・はぁ、ふん、あんたに誉められても嬉しくないもん。ゆうちゃんの方が１００万倍いいもん」
「ふん、口は相変わらずか。そろそろ終いにするぞ」
心はお家芸の裂翔の構え、美樹も四肢に力を込め唯一勝る速さと力に全てを掛けて対峙する
周囲の犯罪組も固唾を飲んで見守るり、執行部も下手に手出しを出来ない状況にある
いかに執行部と言えど美樹と心を相手にするにはいささか戦力不足というものだ
「・・・なぁ遊思、どっちが勝つと思う？」
「技量は心が優勢だね。ただ美樹のリミッターが進化すれば話は別だけどね」

「進化？それってレベル２って事か？」
「ああ」
源さんから聞いてたけど江戸末期に手合わせして勝ちはしたけど相当痛手を負ったらしいからな
「なぁ、美樹のレベル２って何だ？そんな凄いのか？」
「それはまた今度な」
「何でだよ。教えてくれっていいだろ」
「次回な」
「次回？」
「尺が足りない」
「うそぉ！」
嘘じゃない。次回に続く

十話目＝実写版血の池プール（前）（後書き）

慎「次回って何これ？」
作「堪忍して」
慎「ルチャ・リブレ喚ぶぞ！」
作「死ぬって！マジモンのレスラーじゃねーかよ！一撃で砕けるって」
慎「ならさっさと謝れ！さっさと更新しろ！」
作「我、深々謝罪。即更新確約！」

皆でこいつヤろうぜ！まだコイツ生きてたらまた会おうな！ｂｙ慎！

お詫び

えー毎度こんな更新遅い癖に駄文並べやがってコンチキショォォォォォォォォォォォォと言われてそうでビクビクしてるウドの大木です

あ、もし更新したかな？とか思ってアクセスして下さった読者様もーしわけない！
だから刺さないで！

えー私ウドの大木はなんだかんだいって三作同時執筆しているわけで、え？知らない？えマジで！

あ、今はそこじゃない
というわけで三作同時執筆なんて無謀極まりないことやってたせいか４ヶ月更新してないなんて事が多々御座いました
いたっ！痛い、物を投げないで！
あ、まただっせんした
えー察しの良い方はニュータイプ並みに感じたかもしれませんが当面この作品は凍結します
私の処女作？になります一歩先から闇が完結するまでの間、誠に勝手ながら執筆を控えさせて頂きます

注意といいますか、一歩先から闇はシリアスだけだと5話で終わってしまいますがコメディーを盛り込むと１００話越えるやもしれないネタ具合です

一年で足りるか分かりませんがそれなりに長期の凍結となります。

本当に申し訳御座いません
一歩先から闇を満足出来る仕上がりにするため御理解と御協力を宜しくお願い申し上げます
もしかしたら一歩先から闇にノインとか典時とか遊思とか心とか見え隠れするかもしれませんが笑ってするーして下さい

それでは皆様、またこの作品でお会い出来るよう全力を尽くしていきますのでどうか忘れないでぇぇぇぇぇ！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9872a/

晴れのち行方不明

2010年10月22日00時54分発行